

クロスロード

9

特集

活動に+α 応援制度を活用しよう





表紙によせて

既存のスポーツ大会では、運動が得意な児童は一日中観戦しているだけ。児童たちの「やりたい」気持ちに応えたいと、全員が競技に参加できる運動会を企画しました。写真は、運動会に向けてソーラン節を練習したときのものです。当日は大雨のなかの開催でしたが、児童たちの弾けるような笑顔に安堵しました。この子たちは今もウガンダNo.1のソーラン節の踊り手に違いありません。網代健人さん(ウガンダ/体育/2018年度1次隊・東京都)



子どもたちに伝えたいSDGs

世界の学校



2 子どもたちに伝えたいSDGs —世界の学校

3 ■Contents ■索引

4 JICA Volunteers' Reports

特集

5 活動に+α

応援制度を活用しよう

14 派遣国の横顔 ベトナム

～知っていますか?派遣地域の歴史とこれから

20 専門家に聞きました!

失敗に学ぶ ～現地で役立つ人間関係のコツ

22 この職種の先輩隊員に注目! ～現場で見つけた仕事図鑑

24 ひきつけるアイデアを共有

みんなの教材づくり&アクティビティ

26 先輩隊員のシューカツ記

28 派遣から始まる未来

進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

30 待ってます、あなたを! ～各界からのエール

31 あの日、地球の、あの場所で。

32 JICA海外協力隊派遣現況

33 INFORMATION ~JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ~

34 隊員めし 現地で作った日本食、日本で作る現地めし

36 ウチのこだわり —OB・OGショップ 海外編

国別索引	掲載ページ
ウガンダ	1
キリバス	22
ケニア	4, 11
スリランカ	24, 34
タイ	36
ドミニカ共和国	10, 28
トンガ	31
ネパール	6, 21
パプアニューギニア	7
ブルキナファソ	24
ベトナム	16, 17, 18, 26
マレーシア	24
ミクロネシア	2
モロッコ	22

職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	10, 11, 26
青少年活動	4, 28
野菜	21
ソフトボール	6
音楽	31
日本語教育	2
日本語教師	18
体育	1
幼児教育	24
幼稚園教諭	24
保育士	24
手工芸	36
助産師	22
理学療法士	7, 16
障害児・者支援	17
高齢者介護	34

出身都道府県別索引	掲載ページ
北海道	24
栃木県	28
埼玉県	17
千葉県	16
東京都	1, 18, 24
神奈川県	22
静岡県	36
愛知県	6
滋賀県	10
兵庫県	2, 11
山口県	22
長崎県	4, 26, 34
熊本県	31
鹿児島県	7, 21

【凡例】
JICA海外協力隊の隊員(経験者を含む)については、次のように表記しています。

国際協子さん(ケニア/環境教育/2019年度1次隊)	氏名	派遣国	職種	隊次

「JICA海外協力隊」には「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。



上: 駐ミクロネシア日本国大使夫妻が学校に訪れたときに、習字で歓迎の言葉を書いた生徒たちと石原さん(写真後列中央あたり)。学校の中でも外でもはだして過ごす生徒や教師が多かった 左: お好み焼きを作る高校生たち

ミクロネシアの戦争遺構を活用した校舎で 日本語や日本文化を教えました

いしはら 晴次 さん (SV / ミクロネシア / 日本語教育 / 2017年度2次隊・兵庫県出身)

南太平洋の600以上の島から成るミクロネシアには四つの州があり、最も人口の多いチューク州にある、ウエノ島が赴任地でした。

この島は第2次世界大戦終戦まで日本が統治していた歴史もあります。運動会、サンダル、便所など日本由来の言葉が今も島内で使われていました。

現地社会では政治の分野などで日系人が多く活躍しているため、親日国ではありませんが、島のあちこちには戦争の遺構がありました。私の配属先のザビエル高校もその一つで、校舎は日本軍の通信基地だった建物を改装したもので、窓が防弾用に強固に造られており、外壁には空襲の跡が残っていました。

同校はカトリック系キリスト教会の運営する共学校で、ミクロネシア全土から生徒が集まります。全寮制で、生徒の寮も教師の宿舎も同じ敷地にあるため、朝は5時頃からグラウンドで遊ぶ生徒の声で目覚めることがあるなど、教師でありながら、時に肉親のような感覚で生徒たちと関わることができました。

生徒たちは英語、ラテン語のほかに日本語などを学びます。しかし、暑くてクーラーがないので集中力が続きません。授業を2回行ったら、次の1回は「Jカルチャー」と題して、日本の料理やアニメ、歌に親しむ時間としました。日本のアイドルのヒット曲や童謡「里の秋」などを歌いました。料理は、スパム缶詰を使ったお好み焼き、カニカマ寿司、おしるこなどが好評でした。進学校だったため、毎年1〜2名、日本の大学に進む生徒もいました。学校の授業だけでは日本語の読み書きが完璧とはいえませんが、「日本語や日本文化を学んで良かった」と感じてもらいたい、常にそう思っていました。

『クロスロード』(通常号)は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に10回発行しています。

編集・発行:
独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局

本物のソフトボール用具で練習の機会を与えたい



JICA「世界の笑顔のために」▶▶▶ P.6へプログラム



小さなハートプロジェクト ▶▶▶ P.10へ

地域に密着して活動する協力隊員だからこそ、そこで暮らす人々が抱えるさまざまな課題が見えてくる。もちろん一人人ではどうしようもできない課題もあるが、制度を利用することで改善に向かったり、解決できることもある。使えそうな制度があるなら申請してはいかがだろう。今回はJICA「世界の笑顔のために」プログラムと「社」協力隊を育てる会「小さなハートプロジェクト」を利用し、2年間をより厚みのあるものにした4人の事例を紹介する。

活動に+α 応援制度を活用しよう

教育資金確保のために養鶏小屋を製作したい

JICA Volunteers' Reports

派遣先での協力隊員の活動や、OVの活動をリアルにレポート

from Japan

学校に行けないケニアの子どもたちを支えて40年 コロナ禍の危機を乗り越え活動続けるKESTES

KESTES日本窓口委員長 黒田篤樹さん(ケニア/青少年活動/2017年度3次隊・長崎県出身)

「KESTES」はケニアに派遣中のJICA海外協力隊員有志による、奨学生支援団体 (Kenya Students Educational Scholarship) だ。次世代を担うケニアの人材開発に役立ちたいと、人格、成績共に優秀ながら経済的な理由により就学が困難なケニア生徒に対し、セカンドリースクール(日本の中学3年から高校3年に相当)の学費援助を行っています。この活動は、1983年に理数科教師隊員の提案で始まり、現在まで40年近く、350名以上の奨学生に教育の機会を与えてきました。奨学生はさまざまな職業に就いており、博士号を取り大学教授になった人もいます。有志の現役隊員がKESTESの正会員となり、推薦された生徒のなかから選考して奨学金を支給します。大切にしているのは、「顔が見えること」と「心の支えになること」。奨学生担当者となった会員は、奨学生本人はもちろん、自宅や生徒が通う学校を定期的に訪問したり連絡を取ったりして、生活や学校の成績をフォローします。成績が振るわないようなどは、指導教師と話し合い、学習支援をお願いしたりもします。

こうしてケニアの活動を支えているのが、私たち帰国した正会員有志による日本窓口です。大先輩から最近帰国したOVまで幅広い世代があり、日本の広報活動をはじめ、物販や寄付による資金調達、資金管理を行い、定期的に資金をケニアに送金しています。2020年からの新型コロナウイルスの感染拡大は、こうした活動に大きな影響を与えました。3月に派遣中の全隊員が一時帰国することになり、ケニアでの活動を一時休止せざるを得なくなると共に、ケニアの初等・中等教育の全学校も20年末まで休校となりました。奨学金は、隊員が帰国する前に7名の奨学生全員について年度末までの学費を振り込み、支援を継続しました。危惧されたのは、長引く影響で家庭の経済状況の悪化や、オンライン学習インフラが整わなかったために奨学生の学ぶ機会や意欲が損なわれてしまうことでした。こんなときこそ奨学生とのやりとりを絶やしてはいけないと、ケニア在住の元奨学生の助けを借りるアイデアが出て、遠隔でフォローを続けることになりました。隊員派遣再開後も、人数がまだ多くなく活動できる範囲のサポーターによる協力を得ながら

活動を続けています。日本窓口を取り巻く環境も変化しました。以前は首都圏在住者を中心とした活動となりましたが、コロナ禍で協力隊まつりなどさまざまな国際協力のイベントがオンラインで行われるようになったことで、国内外にいる元会員やケニアOVにKESTESが今も続いていることを知ってもらえるようになり、支援や活動参加につながっています。今年は昨年度参加できなかったグローバルフェスタに出席予定です。「ケニアのために何かしたい」という方、ぜひお声がけください。



1 現在の奨学生の一人、Wilis Onyango Ariyoさんとケニアで活動中の大谷 和隊員(青少年活動/2021年度7次隊)



2 2022年4月に行われた「協力隊まつり2022」出店時の様子



KESTESのWebサイト
<https://www.kestes.org/>

活動に+α 応援制度を活用しよう

JICA「世界の笑顔のために」プログラム



●グローブやボールが追加されたことで、一人ひとりが用具を使って練習する時間が増えた
●バットやグローブを触ったことがないネパールの子どもたち。中野さんは持ち方から教えた



●日本から送られてきたソフトボール用具。「ボールは思った以上の数を送っていただきました」

JICA「世界の笑顔のために」プログラム

CASE 1



中野友絵さん（ネパール／ソフトボール／2018年度3次隊・愛知県出身）

中古でも本物の用具に触れる機会を

ソフトボールの名門校である中京大学在学時に全日本選手権3位に入った経験がある中野さん。協力隊員として2019年1月に赴いたのはネパール。ソフトボールはおろかベースボールという言葉すら聞いたことがない人がほとんどという国柄だ。

子どもたちに至っては野球やソフトボールの用具の使い方もわからない。グローブを逆の手にはめたり頭に乘せたりというかわいらしい反応だった。前任隊員が指導していたソフトボールチームは中野さんの赴任時には解散してしまっていた。野球・ソフトボール協会という団体はあり、社会人の野球チームは数少ないながらも活動していた。西アジア大会優勝を目指す男子の野球ナショナルチームもあり、アメリカ人のヘッドコーチが指導。中野さんもコーチとして加わった。

もたちへの普及と指導がある。ネパールの公立中学校には体育の授業がなく、生徒がスポーツをする機会がほとんどない。学校の教師からも要望があった。「ソフトボールでなくてもよかったのだと思います。新しいスポーツの授業が求められていました。授業は男女混合で行いました」

すらできないからだ。

ネパール国内には野球用品店が存在せず、道具は誰かが海外から持ち帰るしかない。逆にいえば、新品のブランド品をわずかに導入しても、数が不足して無用の長物になってしまう。

たのですが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で2カ月後には帰国することになってしまいました」

各学校に譲渡するほどの数はない。用具は授業後に中野さんが回収、在任中は自宅で管理していた。帰国する際にはカウンターパート（以下、CP）にすべての用具を托し、新型コロナウイルスが収束した際には学校巡回を再開するように依頼した。

企画調査員「ボランテニア事業」（以下、企画調査員）から制度のことを聞いた中野さんの申請内容はまずグローブ15個。30人クラスの半分にあたる数だ。そしてベース一式（4個）と練習用のソフトボールを申請。赴任から約半年後、19年秋のことだ。

中野さんが驚いたのは、ボールは段ボール2箱分など想定以上の数が届いたことだ。すべて中古品だが、初めてソフトボールに触る生徒たちには十分。一人でも多くの人が用具を使うことを主眼に置けば、質より量が重要なのだ。中古でも貴重な用具であることには変わりない。中野さんはあえて新品の値段を伝えて大切に扱うことを周知。ボールが遠くに飛んでいってしまったときは、子どもたち自身が見つけるまで捜させるようにした。

「CPは自分たちのクラブチームがあり、道具もそろっています。でも、子どもたちが使える道具は学校にはほとんどないのが現状です」

「練習環境を少しでも整えるために、使える制度はすべて使おうと思いましたが、荷物が届いたのは翌年1月です。それから1年間は活用できるはずだった

「グローブを乱暴に扱った子には周囲の子が『投げるな!』などと注意して

待っている。

CASE 2



貴重な5台の車椅子で病院機能を改善

長嶺快多さん（パプアニューギニア／理学療法士／2018年度2次隊・鹿児島県出身）

理学療法士とは簡単にいえば患者の運動能力の回復や強化を手助けする職種だ。例えば寝たきりの状態から日常生活に戻すためには、座る、立つ、歩くといった基本的な動作を改めて学ばなければならない。

りするには訓練が必要です」

病院の数が極端に少なく、医療や福祉に必要な機材がほとんどない。

「車椅子の使い方指導も理学療法士の仕事です。生活環境はバリアフリーとは限りません。段差もあれば坂道もあります。自分で前輪を上げてバランスを保ったり、坂道を上る体力をつけた

今も筋肉トレーニングは欠かせない。そんな長嶺さんが協力隊の理学療法士として赴いたのはパプアニューギニア。犯罪件数が比較的多く、日常的に注意が必要で、政情不安による行動制限もあったと振り返る。首都以外では

原因だ。衛生状況も悪く、虫刺されか

活動に+α 応援制度を活用しよう

JICA「世界の笑顔のために」プログラム



②日本から届いた車椅子は5台。各病棟に1つずつ設置し、大いに役立てられている
③④簡易車椅子は廃材などを加工して自作。現地ではどうしてもつくれないものだけを「世界の笑顔のために」プログラムで申請した



①日本から送られてきた車椅子。体を固定して自走できるタイプは現地では大変貴重

申請の流れ

JICA 青年海外協力隊事務局 (以下、事務局) から在外拠点に要望調査の依頼

企画調査員が各隊員に当プログラムの情報共有

隊員が配属先や活動先で要望調査

当プログラムを利用する場合、隊員が要望調査票に記載して、企画調査員に提出

在外拠点で査定し、適切と判断されたものを要望として事務局に提出

要望のあった物品を事務局で採択。結果を隊員に告知し、採択された物品は公募 (約1カ月間)

物品の輸送

物品提供者への礼状発送

JICA「世界の笑顔のために」プログラムについてはこちら



「ほかの隊員も経験していることだと思えますが、途上国ではモノやカネを求められることが多いです。しかし、協力隊の本来業務は技術や知識を供与して地域社会に貢献することです」
松葉づえならば病院スタッフが自作

「自分の置かれた環境をよく見て、本当に必要なものだけを選ぶべきだと思います。そうしないと、協力隊が新しいモノを与えるだけの存在と見なされてしまいます」
何を申請するかは慎重を期すべきなのだ。ただし、物品の「質」にこだわり過ぎず、「量」に重きを置く視点も大切だと中野さんは強調する。
「ソフトボールになじみがない人たちが高級な用具を手にしても、価値がわからず、適切な管理もできずに、宝の持ち腐れになってしまいます。使い古した用具であっても、一人でも多くの人が同時に使える量があったほうが良いと思います」 (中野さん)

「現地で本当に求められ、多くの人に頻繁に使用されて、価値を認められるモノならば、管理体制も整いやすくなる。中野さんを介して届けられたソフトボール用具は、子どもたち同士が注意し合うほど大切に扱われた。長嶺さんの車椅子は各病棟で置き場がちゃんと確保され、なくてはならないモノになっている。
自分が帰国したあとも長く大切に使用されるようなモノを精査し、必要な数を申請する。これがこの制度を利用するコツだといえる。」

「後ろから押ししてもらってホイールだけでガタガタしながら移動する椅子を作るのが限界でした」
だからこそ、日本の施設で普通に使用されているような車椅子の希少性を痛感できた。申請書には「成人用の車椅子で年式・型は問いません」と記した5台も集まったのはこの付記があったからかもしれない。
車椅子が届いたときはスタッフにも患者にも大喜びされた。しかし、その直後に「松葉づえも20本送ってもらってくれ。日本のものが見たい」と周囲から求められたという。

「脊髄損傷などの患者さんをケアするために、病院で一番大きな問題は車椅子が足りないことだ。1年間の活動でよく知っていた。それなのに安易に応じたらそのスタッフの仕事とやる気を奪うことになりかねない。「見るだけのために20本も要らないだろう。車椅子以外は申請できない」とはっきり断つと長嶺さんは振り返る。
「自分の置かれた環境をよく見て、本当に必要なものだけを選ぶべきだと思います。そうしないと、協力隊が新しいモノを与えるだけの存在と見なされてしまいます」

「レントゲンでは骨しか映らず内臓の様子かわからないからです」
しかし、仮にCT装置が届いて使用方を現地スタッフに教えたとしても、故障したら一巻の終わりだ。先を見通す視点が求められる。
「現地で本当に求められ、多くの人に頻繁に使用されて、価値を認められるモノならば、管理体制も整いやすくなる。中野さんを介して届けられたソフトボール用具は、子どもたち同士が注意し合うほど大切に扱われた。長嶺さんの車椅子は各病棟で置き場がちゃんと確保され、なくてはならないモノになっている。」

「日本で購入すれば2万円ぐらいなのに、オーストラリアからの輸入品は7万円以上もしました。地方の病院ではとても買えませんし、首都の病院が多く買うための在庫もありませんでした」
赴任からちょうど1年後、長嶺さんは「世界の笑顔のために」プログラムのリストのなかに「車椅子」があることを発見。すぐに申請することにした。

「物品の到着が遅くなればなるほど自分が責任を持って管理して使用できる時間は短くなってしまいます」 (中野さん)
しかし、地域で何が本当に求められているのかを見極めるためには時間と経験が必要だ。着任1年後に車椅子を申請した長嶺さんは「取捨選択」の重要性を強調する。
「脊髄損傷などの患者さんをケアするために、病院で一番大きな問題は車椅子が足りないことだ。1年間の活動でよく知っていた。それなのに安易に応じたらそのスタッフの仕事とやる気を奪うことになりかねない。「見るだけのために20本も要らないだろう。車椅子以外は申請できない」とはっきり断つと長嶺さんは振り返る。」

「ただ、自分が帰国しても適切に使ってもらえるかという視点も必要だ。実は、長嶺さんが本当にほしいと思ったのはCT装置だったという。
「レントゲンでは骨しか映らず内臓の様子かわからないからです」
しかし、仮にCT装置が届いて使用方を現地スタッフに教えたとしても、故障したら一巻の終わりだ。先を見通す視点が求められる。」

「もちろん自走はできません。押ししてもらえばなんとか移動できるレベルです。ジャングルのなかに小さな子どもたちと一緒に住んでいる方だったので、川はおんぶして渡りました」
現地では、一般的な自走式の車椅子は病棟にすら少ない。トイレに行くことができずに失禁してしまう患者もいるぐらいだ。
「日本で買えば2万円ぐらいなのに、オーストラリアからの輸入品は7万円以上もしました。地方の病院ではとても買えませんし、首都の病院が多く買うための在庫もありませんでした」
赴任からちょうど1年後、長嶺さんは「世界の笑顔のために」プログラムのリストのなかに「車椅子」があることを発見。すぐに申請することにした。

「世界の笑顔のために」プログラムは、申請があった物品を日本国内で広く募集し、送り届ける。中野さんも長嶺さんも申請から到着まで4カ月はかかったと証言する。
「物品の到着が遅くなればなるほど自分が責任を持って管理して使用できる時間は短くなってしまいます」 (中野さん)
しかし、地域で何が本当に求められているのかを見極めるためには時間と経験が必要だ。着任1年後に車椅子を申請した長嶺さんは「取捨選択」の重要性を強調する。
「脊髄損傷などの患者さんをケアするために、病院で一番大きな問題は車椅子が足りないことだ。1年間の活動でよく知っていた。それなのに安易に応じたらそのスタッフの仕事とやる気を奪うことになりかねない。「見るだけのために20本も要らないだろう。車椅子以外は申請できない」とはっきり断つと長嶺さんは振り返る。」

「ただ、自分が帰国しても適切に使ってもらえるかという視点も必要だ。実は、長嶺さんが本当にほしいと思ったのはCT装置だったという。
「レントゲンでは骨しか映らず内臓の様子かわからないからです」
しかし、仮にCT装置が届いて使用方を現地スタッフに教えたとしても、故障したら一巻の終わりだ。先を見通す視点が求められる。」

ココに注意!

申請は早めが吉

「この制度はグループなどの小さなものしか申請できないと思いついたと明かす長嶺さん。過去に募集した物品リストを見返したところ、車椅子を発見。急いで申請した。
「ただし、車椅子のように大きなものは輸送費も高くなります。現地で買ったほうが安いようなものであれば、頼むべきではないでしょう。ただ使いたいからという判断で申請すると、その後の活動がやりにくくなる恐れもあります」
長嶺さんたちは車椅子を自作していた。しかし、車輪を自分で回して進めるような高度なものは作れない。ハン

ら病原菌が脳に回って小児まひを起こす子どもも絶えない。回復のためには理学療法が欠かせないが、理学療法士という職種はほぼ認知されていない。
そんな状況でも長嶺さんがパプアニューギニアを大好きになったのは仕事熱心なCPと同僚のおかげだ。みんな笑顔で前を向いていた。長嶺さんによればパプアニューギニア人は手作業が得意で、優秀な義肢技工士もいる。
「廃材でも作ることができて、松葉づえなどは朝飯前でしたね」
車椅子をみんなで自作したこともある。余命わずかしかない女性患者を家に帰らせてあげるためだ。材料は自転車のホイール、鉄パイプ、プラスチック製の椅子など。
「もちろん自走はできません。押ししてもらえばなんとか移動できるレベルです。ジャングルのなかに小さな子どもたちと一緒に住んでいる方だったので、川はおんぶして渡りました」
現地では、一般的な自走式の車椅子は病棟にすら少ない。トイレに行くことができずに失禁してしまう患者もいるぐらいだ。
「日本で買えば2万円ぐらいなのに、オーストラリアからの輸入品は7万円以上もしました。地方の病院ではとても買えませんし、首都の病院が多く買うための在庫もありませんでした」
赴任からちょうど1年後、長嶺さんは「世界の笑顔のために」プログラムのリストのなかに「車椅子」があることを発見。すぐに申請することにした。

五つの病棟にはそれぞれ使い古しの車椅子が1台あるのみ。あと2台あれば、患者の誰かが移動で使っていてもほかの患者はトイレなどに行くことができる。
10台申請して届いたのは5台。それでも各病棟に車椅子2台ずつという体制をつくることができた。送られてきたのはいづれも中古品だが、病院で使い古されたものよりは明らかにキレイで機能面でも優れていた。スタッフも患者も大喜びで、大事に管理した。
新型コロナウイルスの影響で長嶺さん

「この制度はグループなどの小さなものしか申請できないと思いついたと明かす長嶺さん。過去に募集した物品リストを見返したところ、車椅子を発見。急いで申請した。
「ただし、車椅子のように大きなものは輸送費も高くなります。現地で買ったほうが安いようなものであれば、頼むべきではないでしょう。ただ使いたいからという判断で申請すると、その後の活動がやりにくくなる恐れもあります」
長嶺さんたちは車椅子を自作していた。しかし、車輪を自分で回して進めるような高度なものは作れない。ハン

活動に+α 応援制度を活用しよう

小さなハートプロジェクト



②ドミニカ共和国の山間部で村民の生活に必須の道路を舗装
③舗装作業直後の様子。作業は住民総出で行った
④舗装前の道路。急斜面かつ石だらけで事故が多発していた



①落成式の様子。当初の予定よりも長い距離を舗装することができた

学校の敷地内で養鶏を行い、卵や鶏肉を販売したお金を学校の運営資金に充てる。突飛な発想に見えるが、家畜が身近なケニアの農村地帯では「できる」と思えた。現地の市場では豚肉や牛肉よりも鶏肉のほうが高く売れるという勝算もあった。

2018年4月に小さなハートプロジェクトを申請した友永さん。プロジェクト名は「養鶏事業でHIV陽

性・孤児の子供たちに教育のチャンス!!」である。支援対象となったのは、地域の有志が3年前に設立した学校。孤児とHIV陽性の子供たちに無料で教育の機会を与えていた。

「その年の1月に知った学校です。本来の活動が軌道に乗っていたので、この学校にもやれることはないかと思っていました」

地域の保健事務所に配属され、医療

サービスの向上を本来の業務としていた友永さん。精力的に活動してマラリア予防などの面で成果を上げていた。小さなハートプロジェクトについても企画調査員から聞いて知っていたが、お金が絡むことによる現地の「支援慣れ」を避けたいという気持ちがあった。この点では、ケース1の荒井さんと似ている。

「でも、訪問を重ねるうちに先生たち

CASE 2



養鶏事業で教育チャンスの拡充を 友永達朗さん（ケニア／コミュニティ開発／2016年度4次隊・兵庫県出身）

「日本から来てお金を渡し、その場限りの支援になるのは嫌でした。だから、道路舗装の資金を支援してくれという要望はずっと断っていました」

荒井さんは協力隊派遣当初の気持ちを振り返る。派遣先はドミニカ共和国の山間にある80人ほどの山村。地元でNGOが造った温室での花の栽培や品質管理、販売をサポートしてほしいという要望だった。

しかし、実際の温室はコーヒー豆の栽培に使われており、その技術も販路も確立されていた。素人が手を貸す余り

べてのお金を材料費に充てることができませんでした」

小さなハートプロジェクトは「住民の参加協力や自助努力」を条件としている。住民が自らの手で舗装作業をできることは理想的だった。

申請時には「道路のメンテナンスはどうするのか」という指摘も入った。その場限りの支援は回避しなければならぬからだ。この点をクリアする材料もあった。約10年前、住民たちが舗装した箇所があり、その部分は問題なく機能している。今回の舗装も長期的に住民の利益と安全に資するだろうと考えた。実績があるため、1日で何メートルぐらい舗装できて、材料費はいくらかかるのかも予測できた。

「申請には道路建設の専門家による評

価も必要だったので、CPの人脈で紹介してもらいました」

住民全員が山道の舗装を強く求めていたため、作業スケジュールは心配がなかったと荒井さんは振り返る。

「僕のホストファミリーは夫婦そろって村のリーダー格。ホストファミリーは、行政とつながりがある有力者や大きな車を持っているキーパーソンに話をつけてくれました。ホストマザーは女性たちを集め、力仕事をする男性たちのための食事作り。まさに住民総出で作業しました」

コンクリートはセメント、水、砂、石から作られる。このうちの石に関しては有力者が環境省に話をつけて河原から採取できることに。その分だけ材料費が浮き、セメントの寄付もあり、

予定よりも100メートルほど長い約290メートルの箇所を舗装できた。

「もちろん、すべてスムーズに事が運んだわけではありません。コンクリートミキサーが壊れてしまったり人力で材料をかき混ぜたり、雨が降らずに川から水を引けなくなったり。それでも僕が任期を終えるまでに落成式を迎えられたのは、ホストファミリーを中心とした村の人たちとの協力体制がベースにあったからだと思います」

舗装の作業でも人一倍働くよう心がけていたと荒井さんは話す。書類を書いてお金を持つただけでは、多くの住民との信頼関係は結べないと感じていたからだ。荒井さんが主導して舗装した道路は今日も住民の生活を支えている。

CASE 1



より良い住環境のため道路を舗装 荒井孝雄さん（ドミニカ共和国／コミュニティ開発／2017年度1次隊・滋賀県出身）

「日本から来てお金を渡し、その場限りの支援になるのは嫌でした。だから、道路舗装の資金を支援してくれという要望はずっと断っていました」

荒井さんは協力隊派遣当初の気持ちを振り返る。派遣先はドミニカ共和国の山間にある80人ほどの山村。地元でNGOが造った温室での花の栽培や品質管理、販売をサポートしてほしいという要望だった。

しかし、実際の温室はコーヒー豆の栽培に使われており、その技術も販路も確立されていた。素人が手を貸す余り

地はない。荒井さんは女性グループと一緒にコーヒー豆でアクセサリーを作り、町中で販売する試みを行いつつ、「村のために何かできないか」を考え続けた。

「現地で暮らす時間がたつにつれて、骨折に至る重大事故が頻発する道路を舗装する必要を強く感じるようになりました。理想をかざすだけで目の前の問題を解決しない自分の姿勢はどうか、と思うようになったのです」

その道路とは、住民が教会に通ったりコーヒーを出荷したりする際に必要

な村のメインストリートだ。急斜面に石がゴロゴロしている場所も多く、雨が降ると川のようになって危険だった。小さなコミュニティ内の道路のため、行政による舗装は期待できない。

住民との話し合いの結果、道路で最も危険な箇所を部分的に舗装することを決断した荒井さん。小さなハートプロジェクトを活用することにした。

「前提となったのは、村の人たちにコンクリートに関する技術があることでした。家やタンクを自分たちで造っていたので、職人を雇う必要はなく、す

小さなハートプロジェクト

どんな制度？

地域の人々と共に暮らしているJICA海外協力隊員たちには、さまざまな課題が見える。それを具体的に実現するためのサポートの一つが、(一社)協力隊を育てる会の「小さなハートプロジェクト」。学校の環境改善、井戸や水タンク、トイレなどの設置、障害者や女性のグループへの支援、文化や環境の保護など、600件を超える多彩なプロジェクトに支援してきた。送金額の上限は27万円。

活動に+α 応援制度を活用しよう

小さなハートプロジェクト



●学校の生徒たち。「みんな元気でいい子たちで、任期中のメンタルを救ってくれたと思っています」
 ●子どもたちを前に養鶏事業の説明をする様子
 ●現地の大工による養鶏小屋の建設作業



●ひなの世話をする現地の教師。養鶏事業によって学校の運営費の一部を賄う計画だった

申請の流れ

申請者は40歳未満のJICA海外協力隊員に限り、その申請は協力隊を育てる会が通年にわたり受け付ける。隊員の本来業務外のプロジェクトで、現地業務費の支出が不可能なものであることが原則。

協力隊を育てる会は、申請を受けてから審査を行い、支援団体や個人にお願いし、募金を行う。申請から送金までに3カ月から6カ月がかかることもある。その後プロジェクトに着手し、任期内に終了できるようにスケジュールを管理する。

期限内に支援者が見つからない場合や、送金が遅れて任期終了までにプロジェクトが終了できない場合は、プロジェクト取り下げを要請することもある。

小さなハートプロジェクトへの応募はこちら



同じくコミュニティ開発でドミニカ共和国に赴任した荒井さん。道路の舗装という課題には、住民からの要望ですぐに気づいた。しかし、当事者意識を持って取り組むにはやはり1年間の現地滞在が必要だった。

「傾斜がきつくて石がゴロゴロしていて水はけの悪い山道です。私がいの間にも、学生がバイクで転倒して顔の骨を折る事故がありました」

暮らしながら問題の重大性を身にかけてわかった荒井さんは、「道路の課題感」を申請書で伝える工夫をしたと明かす。具体的には、雨の日には濁った川のようになってしまふ道路や、その道路を子どもたちがバイクで通学している風景を写真に収めたのだ。

小さなハートプロジェクトには「住民の参加協力や自助努力」という条件がある。荒井さんがいたコミュニティは男性が自らの手でコンクリートを作り、家、タンク、道路舗装をしており、資材さえ購入できればいつでも舗装作

業に入れるという環境があった。

一方の友永さんにも「学校運営のマネージャーが専門学校で養鶏を学んだ」という背景があったが、その人が養鶏小屋を建てられるわけではない。大工の件費がかさみ、肝心の養鶏もアドバイザーの不正確な助言を信じたために失敗が続いてしまった。

学校の教師たちは教育のプロであっても養鶏には素人である。熱意はあっても事業の継続性には疑問が残る。「帰国してからも『ヒヨコが死んだら』お金を送って」というメッセージをもらったことがあります。送るのは簡単ですが、正直言ってちゃんと養鶏に使われるのかわかりません。自分が現地にいれば、経費に領収書をもって管理できるのですが……」

友永さんはより「スモールスタート」をすべきだったと感じている。教師たちとまずは数羽のひなを飼育してみることから始めれば、小屋の設計を間違えたり多くのひなを死なせてしま

うことは避けられたかもしれない。より良い事業を思いついた可能性もある。荒井さんと友永さんの事例から見えてくるポイントは、申請のタイミングではない。より重要なのは課題の本質をきちんと捉えて、その解決策を現実的に詰めることだ。荒井さんは、問題の多い山道のなかでも特に危険な場所に絞って舗装の計画を立てた。参加する住民の熱意と技術も十分で、一度造った舗装は10年以上保てることもわかってきた。

友永さんの場合は「学校の運営資金が慢性的に不足」という課題設定自体は間違っていない。しかし、学校関係者が養鶏で継続的な収入を得るといふ事業計画には無理があったのかもしれない。

帰国してからは、食品商社で輸出の仕事をしている友永さん。将来的にはアフリカでの起業にも興味がある。「養鶏事業の管理・統括は僕にとっては大変有意義でした」

友永さんにも学校にも勉強になる経験だったのだ。

当初はひな100羽から始める予定だったが、建設費用がかさんでしまったために70羽に削減。半年間はエサ代というコストがかかることを考えると妥当な数だった。「ケニアの人たちは良くも悪くも楽天的で『なんとかなる神様が助けてくれるだろう』という精神です。校長先生は100羽から始め

実際には想定外のことや次々に起こったと友永さんは明かす。2階建ての平飼いの小屋を建設する予定だったが、清掃が大変だとあとから指摘されてケージ飼いに変更。夜間の盗難防止のために防犯アラームシステムの導入も必要になった。

協力隊の活動期間は原則として2年間。小さなハートプロジェクトを申請するタイミングは「早いに越したことはない」と荒井さんと友永さんは口をそろえる。

18年4月に申請した友永さんは7月頭に支援金を得て下旬には養鶏小屋を完成させた。同時にひな70羽を購入し養鶏事業を開始するが、ひなが成長して卵を産むのは半年後。卵を産み終えた廃鶏を肉にして販売するのは18カ月後だ。友永さんの帰国予定は19年3月だったが、最初に購入したひなの多くが死んでしまったことなどもあり、卵

を産むところまで見届けられなかった。「あと3カ月、申請が早ければ卵を見られていたかもしれません。でも、広い地域で自分がやるべきことを自分で探るのがコミュニティ開発です。僕の場合は医療サービスの向上が本来業務でしたが、赴任した地域には15の病院があり、コミュニティヘルスボランティア（CHV）といわれる女性たちが200人以上活動していました。そのなかから適任者を見つけて協力を取りつけ、僕の帰国後も続くような支援を行わなければなりません。軌道に乗るまでに1年以上かかりました」

ココに注意！

まずは課題の見極めから

が低い給料のなかで必死に教育している姿を見ました。学校のマネージャーと先生たちに集まってもらってワークショップを開いたところ、根本的な問題はやはり慢性的な資金不足だとわかりました」

一時的な支援には終わらせない。そう決意した友永さんは関係者との話し合いを続け、小屋を建てて鶏のひなを購入することを提案した。学校運営の養鶏事業を行うのである。マネージャーが専門学校で養鶏を学んだという背景もあった。

ひなが親鳥に育って卵を産み始めるまでには約半年がかかる。その間はエサ代などのコストも含めてプロジェクトで賄い、その後は卵や鶏肉で得た収入のなかから経費を賄う計画である。また、卵を給食に出すことで子どもたちの栄養状態も改善できる。

たいと主張したのですが、素人の私たちが最初から大きな投資をするのはリスクが高いと説明して、最後には納得してくれました」。

その後も誤算が続いた。購入したひなのうち半数がしばらくすると死んでしまったのだ。病気の予防接種をしたのになぜなのか。

原因はケージ内の衛生環境にあった。養鶏のアドバイザーの助言に従って床におがくずを敷いて温度管理を行っていたが、別のアドバイザーによるとそれはひなのふんが蓄積してしまうとのこと。おがくずを取り払って床に金属

ネットを張り、ふんは下に落ちるように変更したところひなの死亡率は著しく低下した。

友永さんは鶏が卵を産むところを見届けることなく帰国することになったが、確認できた成果もあった。校長の学校経営姿勢が変わったことだ。「なんとかなるだろう」だけでなく、限られた資金のなかで最適な決定を論理的に下す。この姿勢は養鶏事業の計画表を友永さんが共有することで養われた。今後、新興国の雇用創出に関わりたいと考えている友永さんにとって大きな糧となる経験だった。

お話を伺ったのは

しみず あきら
清水 暁さん

PROFILE

都市銀行勤務時代、途上国支援の楽しさを知り、1998年に国際協力事業団（現JICA）に入団。モンゴル事務所、財務部財務第二課長、ベトナム事務所次長、資金・管理部次長、財務部審議役を経て2020年3月よりJICAベトナム事務所長。米国公認会計士。



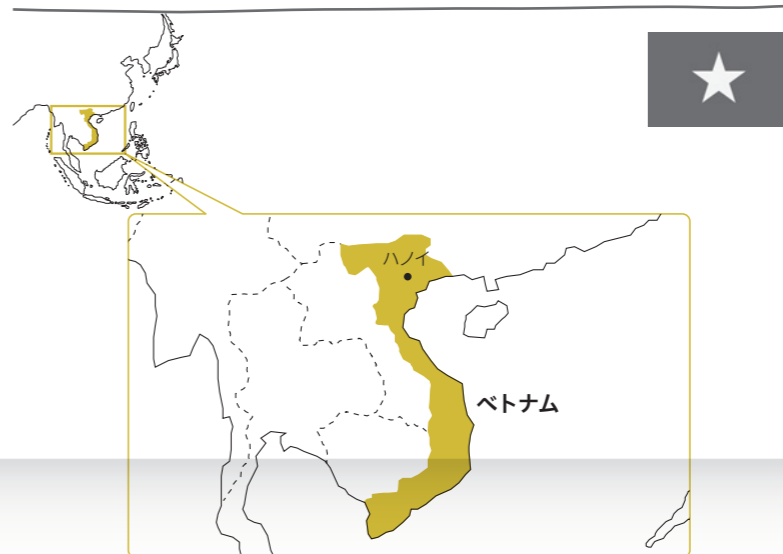
ハノイ市郊外から望む高層ビル群と住宅街（写真提供：高橋智史/JICA）

派遣国の 横顔

知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから 〈ベトナム〉

多くの苦難を乗り越え、成長を謳歌しているベトナム。
2022年春の要請数は各国最多。

ベトナムの基礎知識



ベトナム社会主義共和国

面積：32万9,241平方キロメートル
人口：約9,762万人（2020年、ベトナム統計総局）
首都：ハノイ
民族：キン族（越人）約86%、ほかに53の少数民族
言語：ベトナム語
宗教：仏教、カトリック、カオダイ教など

※2021年4月16日現在
出典：外務省ホームページ
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vietnam/>

派遣実績

派遣締結日：1994年8月25日
派遣締結地：ハノイ
派遣開始：1995年2月
派遣隊員総数：700人

※2022年7月31日現在
出典：国際協力機構（JICA）

「ベトナム北部は、紀元前より漢、隋、唐といった中国王朝に支配されてきましたが、938年に中国から独立しました。以後南部と北部に様々な王朝が成立しますが、1884年にフランスによって植民地化され、「フランス領インドシナ」と呼ばれるようになります。第二次大戦では日本軍が進駐しますが、1945年8月に日本が敗戦すると、翌9月にホー・チ・ミン主席が「ベトナム民主共和国」として独立宣言。フランスなどのインドシナ戦争、南北分断、米国のベトナム戦争と苦難の歳月を経て、1976年によりやく南北が統一した「ベトナム社会主義共和国」が成立しました。」と外務省ホームページ[※]では、その歴史について紹介されています。

ベトナムへの協力隊派遣は1995年2月、首都ハノイでの日本語教育から始まった。職種や派遣人数は拡大し、2022年春募集の要請者数は55人と要請国中、最多だった。

ベトナム戦争等の多くの苦難を乗り越え、1986年、市場経済システムが導入されて以降、特にここ最近経済成長が著しいベトナム。

そのベトナムの特徴をJICAベトナム事務所の清水暁所長はこう話す。「当地に足を踏み入れた瞬間、バイクや車の洪水とクラクションの音、人々大きな話し声に圧倒されます。その一方で、社会全体にエネルギーも感じます。今日より明日はきっと良くなる。騒々しいまでの街の雑踏を眺めていると、長い戦乱と社会の混乱のあと、ようやく訪れた平和を皆謳歌しているように感じます」

「南北に長いベトナムは、北と南ではかなり雰囲気違います。北部は四季

があり、南部は雨季と乾季に分かれます。北部はベトナムの社会主義が開始された地でもあり、古くは（官吏を選考する）科挙の試験も行われていたせいか、官僚的、また北東アジアの感じがします。一方、南部はいわゆる日本人がイメージする、東南アジアの雰囲気です。人の考え方を含めて楽観的であり開放的な印象を受けます」

22年度春募集の協力隊の要請件数を押し上げた背景には、年率6〜7%で続く経済成長があるという。「各自治体が日本企業の投資や誘致につなげるため、日本語ができる人材を育てたいというニーズがある」。

高齢化が急速に進む中、看護や、リハビリなど介護の要請も増えている。「ベトナムではまだ新しい分野のため、技術や制度が確立しただけでなく、マンパワーとしてだけでなく、隊員たちから学びたいという要望があります」。ベトナム事務所では、ウィ

ズコロナのバックアップ体制も整え、隊員の派遣を待っているという。

「官僚的で、日本以上にプライドが高い人が多かったり、年功序列の強い組織だったりと、隊員の皆さんの主張や提案が受け入れられなかったり、活動がなかなか進まず成果が上がらなかったりと悩む場合もあるかもしれません。そのような時は焦らず自分の意見を押し通し過ぎないこともコツです。まずは配属先との人間関係を構築することから始めてください。ベトナムは家族を何よりも大切に社会です。一度相手の懐に入り、家族同様の信頼を得ることができれば、意外とすんなりと提案が通ったり、様々なことに親身になってくれたりします。そして隊員の任期が終了した後でもその経験を活かした飛躍のチャンスが広がる可能性もあります。それもベトナムの魅力の一つだと思います」

※出典：外務省ホームページ
(<https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol81/index.html>)

しのださえ
篠田紗枝さん

障害児・者支援/2016年度1次隊・埼玉県出身

PROFILE

小学生の頃、学童クラブで周囲となじみにくい友達に、「どうしたらもっとうまく聞かれるのか」と心に引っかかった。大学では主に法律を学んだが、特別支援教育への関心が捨て切れず、大学院で専攻。特別支援学校の教員となった。教員以外の世界を知り成長したいと協力隊へ現職参加。帰国後に復職。



生徒と共にキーボードを弾く篠田さん(右から2人目)(篠田さん提供)



患者のリハビリをする奈村さん(奈村さん提供)

なむらひでゆき
奈村英之さん

理学療法士/2010年度1次隊・千葉県出身

PROFILE

協力隊員のドキュメンタリーを見て、「いつか自分も参加したい」との思いを持つ。建設コンサルタント会社で地質調査業務を行うなか、過労で倒れたことから医療職を志す。専門学校に通い、理学療法士に。外国人の看護師らと働くうち、日本のリハビリの技術を伝えたいと協力隊へ応募。認定理学療法士(脳卒中)、呼吸療法認定士。



活動の舞台裏

教師の日のサプライズ

ベトナムにあって日本にはない記念日に「教師の日」がある。ベトナムでは毎年11月20日がその日と決められ、生徒や学生、あるいは保護者が、教師への感謝を示す。篠田紗枝さんが派遣されていたトワイアン障害者リハビリテーションセンターでも、11月20日には毎年、教師の日のイベントがあった。慣習どおり、保護者が教員たちに、花やシャンプーを贈るほか、子どもも大人も一緒に楽しむ催しが行われた。子どもがハスの花の模型を持って踊ったりした。



民族衣装のアオザイを着た同僚教師たちと。左から5人目が篠田さん(篠田さん提供)

同センターではこの日、女性教員たちは、民族衣装のアオザイを着ることが多く、篠田さんも同僚と一緒にアオザイを着て参加した。ほかの教員と一緒にベトナム語で歌も歌った。

派遣2年目の教師の日、篠田さんは予想外の贈り物を受け取った。贈ったのは、生徒でもなく、保護者でもなく、同僚の教員。「私の先生はサエだから」と靴をプレゼントしてくれた。その同僚には、特別支援教育や音楽活動、キーボードの演奏法などを教えていたが、「ベトナムの教員の給与は低く、彼女も決して豊かではなかったと思う。そのなかで、決して安くはない靴を贈ってくれたことが嬉しかった。今も大切にしています」。

真摯な態度で
信頼関係を構築

近年、ニーズが高まる福祉・介護の分野と、派遣当初から続く日本語教育で、変化をもたらした隊員の活動を紹介します。

リハビリ患者のため
検査・評価を導入

ベトナムは2014年に65歳以上の人口が全体の7%を超えて高齢化社会に入った。34年にはその比率は14%に達し高齢社会になると予測されている。介護やリハビリの技術へのニーズは高い。奈村英之さんは10年6月から、ホーチミンにほど近いビエンホア市のドンナイ省総合病院で、運動機能の維持・改善を図る理学療法士として活動した。同病院に派遣された初のリハビリ分野の隊員でもある。

奈村さんを待っていたのは、「外来の患者さんが来ているから対応して」の言葉だった。10人余りの技術員で連日70人から100人の外来患者をみており、その一人になった。「まさに戦場みたいでした」と振り返る。

説明は主に技師長が担当した。

活動終了後も交流は続き、奈村さんは年1回、病院や定年で退職した元技師長を訪ねた。病院のスタッフが奈村さんが勤める日本の病院に視察に来たこともあった。奈村さんが導入した評価表は、その後も改善されながら活用され続けている。

これからの特別支援教育へ
教材作りを広める

経済成長と共に、ベトナムでは障害児・者の支援体制の整備も進んできている。しかし、実際の教育現場では課題が多く残る。そんななか、16年8月

同病院でのリハビリは主に、機器を使った物理療法と、受傷や障害のある関節を動かすことだった。「日本ならリハビリのゴールを立て、立つ・歩くなどの動作も練習し、退院後に自宅で行う自主練習も指導する。それがないので患者さんは通い続けていました」。着任から約5カ月後、奈村さんは同僚に、仕事の悩みなどを聞くアンケートを行った。ほとんどの同僚が「忙しい」「スタッフを適切に配置してほしい」と回答した。リハビリや検査技術を学びたいという声もあった。

活動計画案をまとめ、配属先と話し合いを持った。運動の自主練習には同意してもらえたが、ほかの多くの提案は受け入れられなかった。そんなとき、同僚の一人がこんな声をかけた。「ヒデは専門学校出身だろ。だから話は聞いてもらえないよ」。カウンターパート(以下、CP)は、医科薬科大学卒で、当時20代の副科長。学歴が重視されるベトナムでは、専門学校の出身者は大卒の人に話を聞いてもらえなくても当然という「助言」だった。

奈村さんは「このままマンパワーとしての活動で終わってしまうのか」と思うようになっていたが、奈村さんの仕事ぶりを見ていた人たちがいた。その一人がリハビリの現場を束ねる技師長。配属から1年2カ月後、副科長が産休に入り、技師長がCPになったこ

からハノイ近郊のトワイアン障害者リハビリテーションセンター(以下、センター)に配属され、自閉症児の特別支援教育に関わったのが、篠田紗枝さんだ。篠田さんは特別支援学校の教諭で、現職教員特別参加制度を使って協

力隊に参加した。センターには、センター内の寮で生活する子どもたちと、保護者らの送迎で利用する通所の子どもたちがいた。ベトナムでの障害児の教育は、特別支援学校が少なく労働傷病兵社会省が所管する同センターのような施設やNPOが運営する施設が担っていた。施設がない地域も多く、同センターにも、ベトナム北部のかなり広い地域の子ど

もたちが入所していた。篠田さんはセンター内の宿舎で生活しながら、二つのことに特に力を入れた。一つ目が、教材・教具作り。自閉症の人の多くには、対人関係やコミュニケーションが苦手、こだわりが強いなどの特徴が見られる。日本の特別支援教育では、児童・生徒それぞれの障害の程度や特性に合わせて、教員らが手作りした教材や教具をよく使う。ベトナムでは、教員養成学校で特別支援教育のカリキュラムが始まったばかりで、こうしたノウハウはなかった。同センターの教員の多くは幼稚園教諭や看護師だった。そこで篠田さんは、日本での取り組

とで、状況は動き始めた。その後、技師長はJICAによる日本でのリハビリ分野の研修にも参加し、こう声をかけてきた。「脳卒中で入院している人のリハビリについて、いいやり方を提案してほしい」。

奈村さんが「しつかり検査をし、症状を記録するための評価表を作るのがいい」と伝えると、技師長は「評価表を作るから、次の休みの日に家に来るように」と指示した。

上下関係が厳しく、学歴や年齢、職種を超えた連携が難しいベトナムで新たな取り組みを進められたのは、「技師長との出会い、技師長の存在が大きい。休日に仕事をするなどリハビリへの強い情熱も持っていた」と奈村さん。評価表の活用やリハビリの学習会も週1回開くことにし、一緒に準備もした。

もたちが入所していた。

篠田さんはセンター内の宿舎で生活しながら、二つのことに特に力を入れた。一つ目が、教材・教具作り。自閉症の人の多くには、対人関係やコミュニケーションが苦手、こだわりが強いなどの特徴が見られる。日本の特別支援教育では、児童・生徒それぞれの障害の程度や特性に合わせて、教員らが手作りした教材や教具をよく使う。ベトナムでは、教員養成学校で特別支援教育のカリキュラムが始まったばかりで、こうしたノウハウはなかった。同センターの教員の多くは幼稚園教諭や看護師だった。そこで篠田さんは、日本での取り組



同僚に囲まれる奈村さん(後列中央)

知っていますか？
派遣地域の歴史とこれから
〈ベトナム〉



学生に囲まれる内藤さん (内藤さん提供)

右：学生に囲まれる内藤さん (後ろから2列目の右から2人目) (内藤さん提供)

左：活動を終え、外務大臣からの感謝状を手にする内藤真知子さんとご主人の正和さん (内藤さん提供)

ないとう まちこ
内藤真知子さん

SV/日本語教育/2016年度2次隊・東京都出身

PROFILE

夫の赴任に同行して渡英した際、英語を学んだことをきっかけに、日本語を教える仕事を始める。(公財)アジア福祉教育財団・国際救援センターや(公社)国際日本語普及協会(AJALT)の講師として、日本で在日ベトナム難民に日本語を教えていたため、いつかは現地でも考えていた。派遣が決まったときには、「神様ありがとう!」と感謝したという。



活動の舞台裏

ハノイのママとパパ

内藤真知子さんがハノイ国家大学人文社会科学大学に配属され、現地に滞在していた頃、内藤さんが滞在していた家は、ベトナム派遣中の隊員たちの「憩いの場」になっていた。内藤さんは隊員たちから「ハノイのママ」と慕われた。

当時は家族との同居が認められていて、同居する内藤さんの夫、正和さんは「ハノイのパパ」と呼ばれていた。実は、正和さんは、内藤さんの約半年前に、シニアボランティア(経営管理)としてハノイに派遣されたが、任期中に受けた健康診断結果が好ましくなく、任期を短縮することになった。その後は、個人のボランティアとして技術や経験を伝えていた。



ハノイの内藤さん夫妻の住まいで

障害児・者支援の篠田紗枝さんも、ママ・パパのところに集った隊員の一人。「恋しい日本食を食べたり、ゲームをしたり。活動の悩みを共感しながら相談し合い、楽しい時間を過ごすことで、活動に向かい続けることができました」という。

「多くの隊員たちと話し、交流することで、パワーをもらった気がします」と内藤さん。帰国後、日本でママ・パパを訪ねてきた隊員もいたという。

うした教科書の代わりに学生が日本の文化を感じられるような教科書を使った。対話を通して学ぶ「ピア・ラーニング」や「グループワーク」の手法も取り入れ、「感じたことを絵に描いてみましょう」「お互いに絵を紹介しながら説明してみましょう」と授業を進めた。「間違えてもいいから、言ってみよう」と何度も何度も促した。

学生から「日本語の授業は楽しい」「先生の授業が楽しみ」という声が聞こえるようになり、学科長も内藤さんの考えを尊重して支えてくれた。

しかし、授業を変えるのは、容易ではなかった。内藤さんには、忘れられない記憶がある。日本語教育の勉強会

で知り合ったベトナムの小学校の教員が見せてくれた写真だ。教壇の後ろには、「教師はよく教え、生徒はよく習え」のスローガンが掲げられていた。「教育観の違いに加えて、上の権威は圧倒的で、それに従うという傾向もあります。それでもせつかく日本語を勉強することになったのなら、世界を広げ、成長につながるきっかけにしてほしい」とい思いで活動しました。

内藤さんは改革を目指し、戦略的に動いた。初めに十分に状況を観察し、その後は人間関係をつくる。あせらず、2年で結果を出すことを目標にした。孤軍奮闘にならないように、ほかの日本語教育の隊員や専門家とも相談を重

ねた。「ベトナムの先生方は日本研究が専門で日本語教育が専門ではありませんでしたが、一生懸命に日本語を教えてきました。それを変えることは、やってきたことを否定し、プライドを傷つけることにもなりかねません」とベトナムの教員にも思いをはせた。

内藤さんの提案は受け入れられ、実施後は現地の教員からも「変えて良かった」との声が上がった。

「私たちは人との出会いを通じて成長します。日本語教育が充実することで、学習者が新たな人と出会う機会を広げてくれればうれしい」と内藤さん。その思いを胸に、今も難民たちに日本語を教えている。

「音楽の時間」ができ、キーボードに取り組んでいた教員が配置された。

活動を終えた篠田さんは復職し、授業でベトナムのことが取り上げられることがあれば、食べ物や音楽、現地の様子などを紹介し、クリスマスには伝統楽器を演奏する。

ベトナムで活動して、「子どもたちへの接し方が変わった」と篠田さんはいふ。「『こうしてほしい』という自分の考えにとらわれるのではなく、相手の気持ちを察することを、より意識する

「忍耐」の日本語学習から学んで楽しい授業へ

活動先でベトナムの人々と接することで子どもたちとの接し方が変わった篠田さんに対し、日本でベトナム人と接していたことがきっかけで協力隊に参加した人もいふ。日本在住のベトナム難民らに長年、日本語を教えていた内藤真知子さんは、「いつかこの人たちの母国に行って日本語を教えた」と考えていた。16年10月、その希望がかない、シニアボランティアとして、ハノイ国家大学人文社会科学大学の日本語に配属された。

当時、64歳。誰もが難しいというベトナム語について、「日本語教師なので、文法や、先生の説明の意味は理解できました。しかし、覚えられなかった。年齢のせいですね」と笑う。授業は日本語で行うので、問題はなかった。

要請内容は、学生に日本語、教員に指導法を教えると共に、大学院設置に向けて中級・上級の日本語のカリキュラム作成の支援をすること。しかし、

開講されていた初級クラスの授業で、すぐに問題が見えた。「学生たちはみんな真面目でいい子ばかり。でも、間違いを恐れて、とにかく話さない。だから身につかない」。

同じ頃、日本の大学が主催する日本語のスピーチコンテストがあった。テーマは「日本語を学んで得たもの」。原稿を読んでもみると、ほとんどの学生が「日本語は大変難しいので、学ぶには忍耐が必要ですよ」などと、「忍耐」を挙げていた。

外国語を学び自分を表現する、世界を広げるという発想が感じられず、内藤さんは、初級の主教材の変更など、カリキュラム見直しを提案した。

それまでの授業は文法が中心で、教科書も「次の文の空白に入る単語は何でしょう」などの内容が多かった。こ



離任時に学生がサプライズで手渡してくれたアルバム。内藤さんとの楽しい授業の写真で彩られている (内藤さん提供)

専門家に聞きました！ 失敗に学ぶ 現地で役立つ人間関係のコツ



今月の教える人 **志和地弘信**さん

ネパール／野菜／1985年度3次隊、SV／ネパール／園芸作物／1989年度0次隊・鹿児島県出身

1960年、鹿児島県生まれ。東京農業大学農学部卒業後、85年に協力隊に参加。帰国後鹿児島大学大学院へ進学（農学博士）。2004年より東京農業大学勤務。現在、東京農業大学常務理事、同大学大学院国際食料農業科学研究科国際農業開発学専攻指導教授、同大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授。

今月の
お悩み

今月のテーマ：技術力に自信が持てない

畑ですぐに的確な
アドバイスができません、
信頼を得られません。

（農業関連職種／男性）

複数の村の農家に巡回指導に行っています。派遣国では日本で当たり前に使っていた農機具がなかったり、日本にはいない害虫の被害があったりと、戸惑うことが多いです。知識・経験不足で生育不良の原因をすぐ

に伝えることができず、農家の方々から「わざわざ遠い日本からなんのために来たんだ」と見られてしまうようで、疎外感を感じます。日本で派遣国の農業の状況を把握してもう少し勉強しておけばよかったです。

志和地先生
からの
アドバイス

便利なアプリの活用も勧めますが、
まずは一緒に過ごす時間を大切に。

専門家ではありませんから、どの職種で派遣されても同じ悩みがあるかもしれません。

「大学で学んだことを生かして、協力隊員として途上国の人のために活動したい」といった思いを持って東京農業大学に入学してきた学生でも、入学後に応募を諦めてしまう学生がいます。そうした学生の一番の理由が、相談者さんと同じように「技術力に自信がないから」です。

気持ちをはわかります。農業職種の隊員に求められるのは、医者でいう内科医のようなもので、作物の生育を見て、「これは栄養が足りない」とか「この病気だ」などを診断しなければなりません。

原因はカビかウイルスか、養分が欠乏しているだけか、そもそも土壌に合った作物か——などを総合的に見て判断を下す必要があり、それには知識と経験の両方が必要になる。しかし種をまいてから収穫に至るまでには数カ月から数年の時間がかかるため、学生では圧倒的に実地

経験が足りないわけです。

誤った判断で進めてしまうと、農家の収入源が断たれる可能性があります。大きな責任が伴います。学べば学ぼう、「自分はまだその段階ではない」と不安にさいなまれてしまうのでしょうか。

東京農業大学では、そうした学生のためにさまざまな経験を増やすための制度を用意していますが、相談者さんのように、協力隊に参加してから自分の技術や知識のなさをどう補えばいいかと壁にぶつかったり、判断に迷ったりしている方もいると思います。

そうした方に技術面の補完としてお薦めしたいのが、A-アプリの活用です。便利な時代で、農業関係であれば、作物の写真からA-が病気などを診断してくれるアプリが複数開発されています。

例えばフィリピンにある国際稲研究所が開発したアプリは、国や品種を入力すると、「何月何日ごろにこれくらい生育し、

この時期には害虫が出るから、そのときにはこの農薬をまけばよい」といったことまで表示されます。

それなら地元の農家の人が使えば解決でき、協力隊員は不要と思われるかもしれませんが、そうとも限りません。アプリの診断を読み解くためには、スマホやタブレットの操作に加え、化学や生物学といった専門知識

と、そもそもアプリが表示する言語が理解できなくてはなりません。多少なりともそれらの知識を持つ協力隊員なら、アプリの診断を読んで、地元の状況と照らし合わせたうえでアドバイスが活用することができ

ます。

農業職種にかかわらず、今はインターネットで調べた情報を、活動の参考にする隊員は少なくないでしょう。活用できそうなアプリなども探しながら、うまく自分の知識を補ってほしいかがでしょうか。

一方で、絶対にやってほしいことがあります。地元の人の話

をしつかり聞き、「地元の方がやってきた農業」の方法を理解したうえで、それを否定せずに改良できる点を探すことです。

派遣先や職種によっては、協力隊員でも専門家のように迎えられることもあるでしょう。そうした場合でも、まず、相手と同じ目線に立って信頼関係を築くことが大切です。

地元の人が代々行ってきた方法は、先進国の人間からすると時として「古くさい、効率の悪い方法」と見えることもあるかもしれませんが、その土地の地形や気象条件など、さまざまなことが関係した結果であることが少なくありません。

何よりもまず先にカウンターパートや地元の人たちを信用して、むしろ自分が教えてもらう立場で接することから始めましょう。一緒にお茶を飲んだり、生活を共にしたりすることで、人となりを理解してもらい、相手のことを理解し、信頼関係を築く。それがあって初めて、聞く耳を持ってもらえます。



この職種の先輩隊員に注目!

～現場で見つけた仕事図鑑

#0014

「助産師」

分類: 保健・医療

派遣中: 7人(累計:648人)

類似職種: 看護師、保健師

※人数は2022年7月末現在。



CASE 1

たかのともか
高野友花さん
モロッコ/2016年度1次隊・神奈川県出身

PROFILE
中学生のときに国境なき医師団の本に感銘を受け、医療による国際協力を志す。大学で看護師、保健師、助産師の資格を取得。4年間の病院勤務ののち、協力隊に。今年9月までリバプール熱帯医学校に留学。

配属先: 保健省エルジャディダ県支局
要請内容: 保健省支局に所属し、エルジャディダ市や県内の保健センターで妊産婦健診業務に関するスタッフへの助言や住民への啓発、また母親学級運営に関する助言を行う。



CASE 2

しまたに みなみ
嶋谷南さん
キリバス/2017年度3次隊・山口県出身

PROFILE
フィリピンで産院を運営する隊員OVに憧れ、大学で看護師、保健師、助産師の資格を取得。病院勤務、フィリピンの助産院やタンザニアのNGOで活動後、協力隊に。JICA勤務を経て、現在、東京都で保健師。

配属先: キリバス家庭保健協会
要請内容: 同僚看護師や配属先スタッフと協力して、若年層を対象とした思春期保健指導、医療データの管理、コミュニティ巡回指導、一般患者へのリプロダクティブヘルス・サービスの提供。

「助産師」の職種の要請内容は、母子保健の向上、性と生殖に関する健康と権利に関わる領域になり、具体的な活動は多岐にわたる。

配属先と活動内容は主に、①病院で産科看護、新生児看護、助産改善(知識、技術、倫理など)を指導する、②地域で母子保健サービスの提供、家族計画や若年妊娠に関する啓発教育を行う、③助産師養成学校で助産師養成教育の改善や指導にあたる、に分けられる。日本で助産師として行っていた医療行為を行えない国があるほか、性を扱うことは社会・文化的にタブー視される国も多い。

今回は、行政、NGOという異なる立場で、②の地域における活動を医療行為を行わずに展開した隊員を紹介する。

センターを巡回するなかで気づいたのが、全センターを管轄するカウンセラーパート(以下、CP)はそのうち1カ所のセンターの看護師長との兼務で忙しく、ほかのセンターの状況を把握していないことだった。これではスタッフたちがいくら頑張っても評価されない。高野さんは、各センターの活動評価表を作りCPと共有した。

「できていないことに偏らず、良い点も伝えるようにしました。CPはそれを見て、ほかのセンターの現場訪問を増やしてくれました」

一方で、モロッコ医療の人手・予算不足という課題も見えた。例えば、分娩のできるセンターでは多いと年間1000件の分娩が行われ、夜間は助産師一人に対応する。

「隊員は人事など医療体制にまでは介入できませんが、モロッコのお母さんや赤ちゃんの健康のために少しでも役立つしたい。現場の状況を知りながら仕事の負担になり得る母親学級の導入を進めるといふ葛藤を抱えながらの活動でした」と高野さんは振り返る。「モロッコでは国の政策目標と現場の実態には隔たりがあり、今後それを埋める



③「妊婦体験ができるジャケット」を着用した若者たちと嶋谷さん(右から3人目)。「キリバスの女性がよく腰に巻いている一枚布「ラバラバ」、ごみ袋、土7kgの三つで作製しました」(嶋谷さん)。妊娠約8～9カ月の妊婦体験ができる



①保健センターで行われた母親学級。「モロッコ人は話すことが得意なので、どうやるかを理解すると初めてでも堂々と母親学級を実施していました」(高野さん)
②妊婦健診を広く知ってもらおう一環で、中学校で「命」をテーマに授業をする高野さん。「イスラム圏のモロッコでは男女を分けがちですが、男女両方の生徒に参加してもらうことを大切にしました」

CASE 1 人手不足の現場で「母親学級」の普及・定着を図る

モロッコの保健省は妊産婦・新生児の死亡率低下を図るため、2009年から「母親学級」の全国普及をJICAなどの協力の下で進め、妊娠中最低4回の妊婦健診の受診を推奨してきた(日本では14回が標準)。高野友花さんへの要請も、普及が遅れ、妊婦健診も平均2・21回という県での母親学級の普及・定着支援が中心だった。

配属先は県内の保健センター(以下、センター)と病院を管轄する部署。高野さんが助産師や看護師に母親学級について聞くと知らない人が多く、知っているも「忙しい」「モノや場所がない」「やり方を知らない」との答

ような仕事に携わりたいです」。

CASE 2 「若年妊娠」予防のための実態調査を行い、広く共有

嶋谷南さんの配属先のキリバス家庭保健協会(KFHA)は、長年、「性と生殖に関する健康と権利」に関する啓発活動を行ってきたNGOだ。

キリバスでは若年妊娠(20歳未満の妊娠)が問題になっており、避妊法普及率も大洋州のなかで低かった。配属先からは相談者への医療行為を求められていたが断り、相談のうえ、若年妊娠の予防活動をメインにすることを決めた。「実態や背景が把握されていないので、効果的な予防活動のためには調査が必要だと配属先を説得しました」。

嶋谷さんはスタッフと共に、首都・南タラワの19歳以下の若者382人に調査を実施。その結果、22%しか避妊具を用いないこと、若年妊娠した人の86%が学校を中退し、90%が無職であることがわかった。避妊などに関するサービスを受けられない理由は、①知識の欠如、②環境やアクセスの悪さ、③

え。「母親学級は妊産婦に対して正しい知識や情報を伝えて健診受診や施設分娩を促し、産前産後の準備や生活を大切にもらいたい、母子共に元気に過ごしてもらいたいに行います。その重要性を伝えることから始めました」。

高野さんは配属先の同僚の医師、助産師と共に各センターに研修を行った。理解の正確さと継続性を重視し、高野さんの指導案をモロッコ方言を交え医師、助産師に講義してもらった。

その後、各センターに母親学級を実施してもらい、助言・指導した。センターは健診・出産費用が無料のため、訪れる妊婦は貧しい人が多く、識字率が低い。イラストや模型を使ったりわかりやすい教材利用を働きかけた。実施対象35カ所中31カ所に研修を行い、23カ所で実施されるようになった。

性について知る心の準備ができていない、④飲酒による性行動の誘発、⑤男性優位で理解が得られない、などだった。この結果を首都の校長先生たちに共有すると、「学校では理科の授業で男女の身体の違いなどを話す程度で、性について話すことはタブーとされ、どのように学生に話したらよいかわからないという声が上がってきました」。

そこで、KFHAはユースボランティアによる学校での啓発活動を行うこととした。嶋谷さんはボランティアと相談しながら、劇、妊婦体験ジャケットの着用体験、人生設計ワークショップ、コンドームデモンストレーションから成るプログラムを実施した。

「音楽に乗せて劇をしていると、コミユニティの人たちも集まってくるんです。結果、大人にも性や避妊について知ってもらえたのではないかと思います」

こうした活動は、KFHAが学校巡回で行うプログラムに包括的性教育の内容を組み込むことにもつながった。「人々の行動はすぐには変わらないと思いますが、ユースボランティアが活動を継続し、キリバスの未来を変えていってくださることに期待しています」

活動の基本

医療行為ができないことや社会的タブーなどの制約があってもさまざまなアプローチを積極的に試す

みんなの教材づくり & アクティビティ

海外協力隊OVが派遣国の活動や生活で実践した、お役立ちアイデアをご紹介します。

今月の先生



くぼたみゆき
久保田美幸(旧姓：小林)さん
(マレーシア/保育士/1989年度3次隊・東京都出身)
保育・幼児教育者の職種別OV会「JICA海外協力隊幼児教育ネットワーク(旧「JOCV幼児教育ネットワーク)」会長。1990年、公立保育園より協力隊に現職参加し、帰国後に復職、2020年3月まで勤務。現在は保育経験を生かした日本語教師として活動中。



鶴見さんが現地の保育者のためにシンハラ語で作成したテキスト。目的や作り方、遊び方が絵入りで、わかりやすく解説されている。

教えてくれたのは…
鶴見志織さん
(スリランカ/幼稚園教諭/1999年度2次隊・東京都出身)

保育幼児教育の教材は、粉ミルクの空き箱をフル活用！

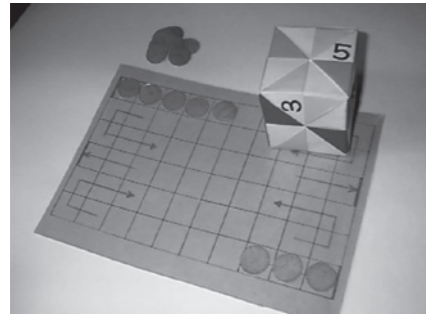
先月号に続き「JICA海外協力隊幼児教育ネットワーク」代表の久保田美幸さんが紹介してくれた保育幼児教育教材は、スリランカに派遣された鶴見志織さんが考案した「粉ミルクの箱を活用した遊具」です。

「物のない地域で、使えそうなものといったら粉ミルクの空き箱ぐらい。箱を開き、一枚の厚紙にして作ったバズルやすごろくなどの手作りおもちゃのアイデアは、どこの任地でもまねできそうです」

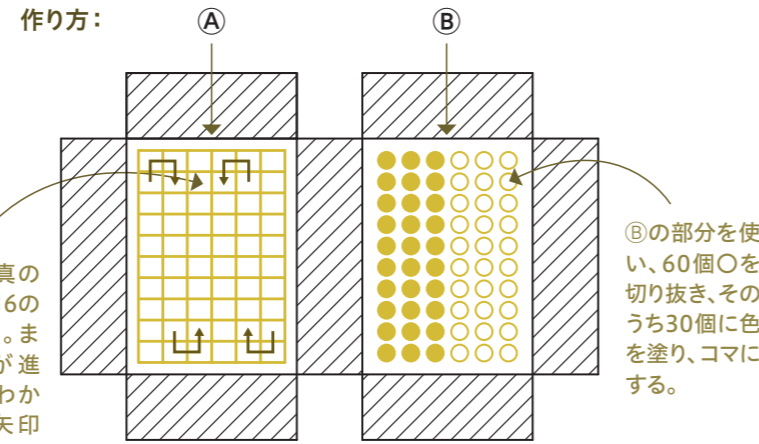
ただし絵を描くときに気をつけたいのが任地の宗教や価値観。「地域によっては動物を擬人化できないことも。なかには豚の出る絵本を見てはいけない村などもありますから、注意してください」。

数認識のゲーム

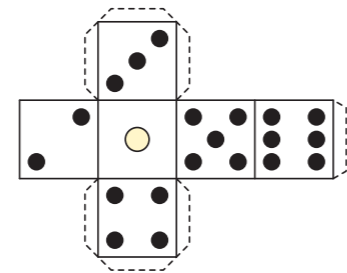
サイコロを振って出た目だけ、マスにコマを置いて進むすごろくゲーム。遊びながら数の認識を身につけることができます。



①に左写真のように10×6のマスを書く。また、コマが進む方向がわかるように矢印を書く。



空き箱を広げ、①をすごろく盤にする。②でコマを30個ずつ作り、コマの半分に色を塗る(斜線部は使用しません)。



※写真では折り紙でサイコロを作っていますが、厚紙でサイコロを作る場合は、左記の展開図を参考にしてください。

遊び方:

対面の角からスタートします。サイコロを振る順番を決めます。先攻がサイコロを振って、出た数だけコマをマスに置いていきます。コマを置くときには「いち、に、さん……」と声に出して数を数えます。その後、後攻も同じように行います。交代しながら進めていき、早く30コマを置いたほうが勝ちです。

魚釣り遊び

どこの国でも見かける「釣り」は、人気のごっこ遊びの一つ。釣り糸の先に少し開いたクリップを結びつけて、魚を釣りあげます。

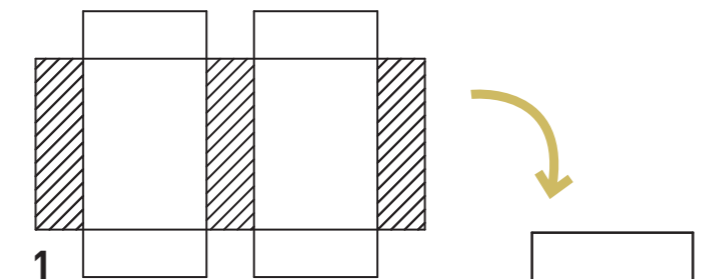
遊び方:

魚をたくさん作って床に置いたら、釣り糸の先のハリを魚の口に引っかけて持ち上げます。友達と競争して釣ると大盛り上がり。保育者は、子どもが魚の口にハリをうまく引っかけられるように見守りましょう。

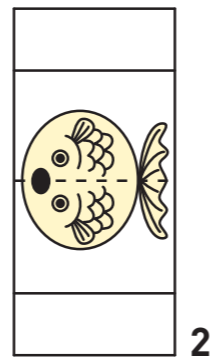


魚の口にハリを引っかけようと子どもたちは真剣。目と手を協応させながら、集中力を養います

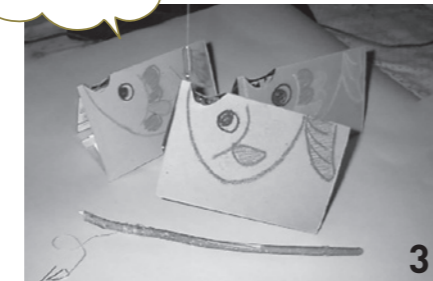
作り方:



1 空き箱を広げる。一面につき一つの魚を作る。



2 魚を描いて、色を塗る。



3 紙を半分に折って、魚の口を切り取る。下部分をのりで貼り合わせる。釣竿部分は、枝に糸を巻きつけて結ぶ。糸の先端にクリップを結びつけてハリにする。

ジグソーパズル

空き箱を広げ、厚紙に子どもたちの好きな動物などの絵を描いて、適当な大きさにカットした、オリジナルジグソーパズルです。

材 料: 厚紙(粉ミルクの空き箱を開いたもの)、絵の具

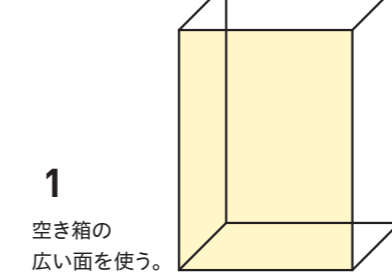
遊び方:

バラバラにしたピースの絵を見ながらピースを合わせていき、1枚の絵を完成させます。子どもたちの好きなものの絵を描けば、いっそう楽しく遊べます。

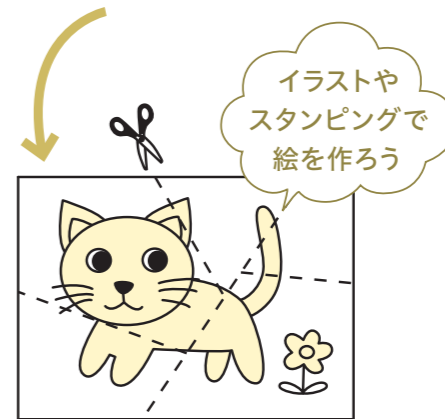


注意点: 絵を描く際、ネコや犬などがしゃべったり、歩いたり、動物を擬人化させるのがNGという国もあるので、配慮しましょう

作り方:



1 空き箱の広い面を使う。



2 イラストやスタンプングで作った絵をピースごとに切り取る。

アドバイス

複雑なピースではないですが、元の絵をもう1枚用意して、それを見ながらピースを合わせるとわかりやすいと思います。

チョーク+小麦粉でスタンプング用絵の具に

スタンプング(型押し)をする際、絵の具がないときには、削ったチョークに小麦粉と水を混ぜると、ほどよい粘度のスタンプング用絵の具ができます。チョークの色を混ぜれば、色のバリエーションも増やせます。



ブルキナファソのCEEP(幼児教育施設)で、チョークを使ったスタンプの準備をする濱さん

教えてくれたのは…

はまか なみ
濱 香菜美さん(旧姓:舟津)
(ブルキナファソ/幼児教育/
2013年度1次隊・北海道出身)

シューカツ記

帰国後、内定までの
就職活動の方法を聞きました。

大学時代にサークル活動で国際協力NGOに参加し、カンボジアで教育支援をした大宮綾佳さん。在学中に留学先や旅行先で協力隊員の活動を目にしたこともきっかけとなり、一般企業で経験を積んだのちに協力隊に参加した。赴任先のベトナムには日系企業が数多く進出しており、活動中はそこで働く日本人と交流を持つ機会も多かった。ベトナムでの生活にも魅力を感じるようになったという大宮さんは、活動終了後にベトナムで働くことを決め、日本の人材紹介会社のベトナム支店から内定をもらった。

しかし、2020年3月に帰国する

と、新型コロナウイルスの感染拡大により状況は一変。しばらくはアルバイトをしながらベトナムに戻る日を待っていたが、渡航再開のめどはいつまでたっても立たず、プランを変更し、国内で就職することを決めた。

「私の地元、長崎市は人口流出率が全国ワースト1です。将来を考えたとき外国人との共生が鍵となると考え、地域と外国をつなぐ仕事をしたいと思いました。教育分野にも引き続き興味があったので、海外と人材教育の二つに関われる仕事に就きたいと考えました」

就職活動では、社会人教育や人材紹介の会社からも内定をもらい、最後まで入社を悩んだ会社もあったという。最終的に外国人専門の事業を行う現在の会社を選んだのは、海外と関わりたい、協力隊の経験を生かしたいという思いが強かったからだ。

「外国人との共生という分野で、新しいチャレンジをしてみたいと思ったことも決め手になりました」

社員を表彰する21年度の「GTNアワード」では、社員投票でその年にもっとも活躍した社員に贈られるMVPを受賞するなど、大宮さんの働きは社内でも高く評価されている。

「またベトナムに戻りたいという思いもあります。当面はやりがいのあるこの環境で学び、社会に貢献していきたいです」

「多文化共生」を実現し、 地域と海外をつなぐために



今月の先輩

大宮綾佳さん Ayaka Omiya

ベトナム/コミュニティ開発/
2017年度4次隊・長崎県出身

就職先：
株式会社グローバルトラスト
ネットワークス (GTN)



事業概要：外国人専門の賃貸住宅保証、不動産賃貸仲介、生活サポート、アルバイト・就職紹介、携帯電話サービスなど各種事業を展開する外国人総合サービス会社

大宮綾佳さんの略歴：
1990年 長崎県生まれ
2014年 4月 大学卒業後、株式会社ベネッセコーポレーション入社
2018年 3月 青年海外協力隊員としてベトナムに赴任
2020年 3月 帰国
2020年12月 株式会社グローバルトラストネットワークス入社

JICA海外協力隊ウェブサイト
「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※カウンセラー/相談役により対応可能な日が異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。



1 協力隊時代 2018年3月～



上：一緒にお土産開発をしたタイ族の仲間と地域のお祭りにて
左：村の人とゴミを拾い、花を植える活動

配属先のイエンバイ省女性連合は、女性の地位向上、収入向上、生活改善などを目的に設立された組織で、住民の援助・啓発活動を行う下部組織の監督・管理を行っています。要請内容は、啓発・広報活動の支援・改善でしたが、省にとって私が初めての隊員だったこともあり、赴任からしばらくは、同僚との良好な関係構築、地域の文化の理解と課題の発見に努めました。その後、女性連合が力を入れているCBT（コミュニティベースドツーリズム※）の分野を中心に活動することを決めました。具体的には、ホームステイ事業を実施している四つの村で少数民族の家庭を訪問し、聞き取り調査を実施。ホームステイ事業の関係者がCBTの課題や情報を共有できるよう、CBTの成功事例を持つNGOから講師を招き、ワークショップの開催にこぎ着けました。約40人の参加者からは、モチベーションやアイデアを得たという声もいただき、その後のツアーづくりやお土産開発、環境教育の活動にもつながりました。

※CBT…地域コミュニティの住民の自立的な参画により行われる観光振興

2 帰国後～就職先探し 2020年3月～

日本で就職活動を始めにあたり、改めて国内でやりたいことを考えたとき、地域と海外をつなぎ、個人の成長をサポートする人材教育の仕事をしたかったです。しかし、人材紹介会社や求人サイトに登録しただけでは、その両方を満たす求人情報にはなかなか出会いません。そこで、「教育」「人材」「ベトナム」「多文化共生」「地域づくり」などをキーワードにネットを検索。条件に近い企業をリストアップして採用をしているか問い合わせ、受け付けている会社に履歴書を送りました。

3 書類提出

提出書類 ▶ 履歴書、職務経歴書

協力隊の活動だけでは、就職活動で会社からキャリアとして見てもらうことは難しいと感じていました。そこで、職務経歴書には、まず前職での経験や成果を詳しく書きました。そのうえで、協力隊では、日本人が一人もおらず日本語が全く通じない環境で、現地の人たちと関係を構築し企画を立て、稟議も含め周囲を巻き込みながらワークショップを開催したというプロセスを強調しました。それがどこまで伝わったかはわかりませんが、そのほうが説得力を持つはずだと考えました。

4 面接

ネットで検索し見つけた会社と、人材紹介会社から紹介された会社、合わせて10社くらいと面接しました。コロナ禍ということもあり、面接はすべてオンラインでした。今の会社との面接は2回。面接の相手は、1回目は電話で問い合わせをした人事担当者、2回目は社長です。面接では、協力隊での成果などはあまり聞かれなかったように思います。それよりも、協力隊参加の理由や活動中の困難、それを乗り越えた経緯、そしてこれから私が何をやりたいのかを聞かれた記憶があります。うまく伝えられたかはわかりませんが、前職での社会人経験と協力隊での活動を根拠に、行動力、積極性、巻き込み力をアピールするよう心掛けました。

2020年12月 ▶ 入社

現在の仕事

人事・広報部に席を置いています。自社制作のウェブ番組のパーソナリティ、社内のSDGs推進のプロジェクト、国内企業に外国人を紹介する人材紹介事業、JICAもかわる在留中・来日予定の外国人向けポータルサイト「JP-MIRAIポータル」のコンテンツの企画・制作・調整、さらに、帰国後に取得したキャリアコンサルタントの資格を生かし、日本で働きたい外国人のキャリアアドバイザーなど、幅広くさまざまな業務に携わっています。所属にかかわらず、意欲があればチャンスをもたらせる会社なので、自分がやりたいと思うことにどんどんチャレンジさせてもらっています。



SDGsの活動ミーティングにて



社内向け動画の撮影の様子

先輩へメッセージ

就職に限らずどんな道であっても、私は自分が選んだ道を自ら正解にしていけばよいと考えています。選択に悩んだり葛藤したり、悔しい思いをすることもありますが、その信念があれば、葛藤も含めて環境を楽しみつつ、前へ進んでいけるのではないかと考えています。私自身、ベトナムに戻るか日本で就職するか、どの業種を選ぶかなど、悩み苦しんだ時期もありましたが、それが今の充実した毎日につながっていると感じています。

廣瀬さんの歩み

ろう者であることが2歳で判明、両親が読話(※2)や日本語を教えた。学生時代にはバックパッカーとして欧州や南米をはじめとする世界各地を旅するなど、活発な青春を過ごす。

2002年にペギーさんと手話学校The Sign Language Intersectionを起業。



アメリカ手話、スペイン手話、イギリス手話、ニュージーランド手話のクラスをつくりました。Intersectionは交差点という意味です。

2006年にダスキン愛の輪プログラムで海外派遣研修に参加(愛の輪プログラムは「撫子寄合」の運営も支援している)。



アメリカのさまざまな会社を見学して、ろう者もできる!を確信しました。

2013年、青年海外協力隊でドミニカ共和国へ派遣。当初のブラジル希望はビザの関係で派遣国変更。

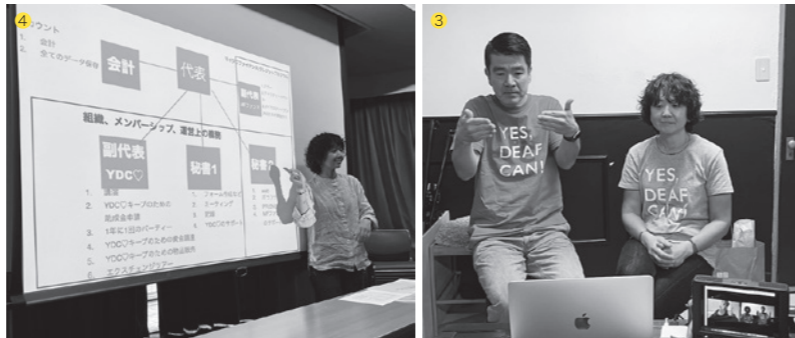


語学訓練がポルトガル語からスペイン語になって苦労しました。駒ヶ根訓練所の某先生がとても厳しくて(笑)。

帰国後の2015年、ろう者の事業支援のYes, Deaf Can!を設立。19年にNPO法人となる。



世界には4億6600万人のろう者や難聴者がいます。世界人口の5%以上。もっと多くの支援機関があってもいいはず。



①ドミニカ共和国での活動時の一コマ。配属先のNGOが運営する学校では、地域の貧しい家庭から80名の聴覚障害がある子どもたちを受け入れていた ②NPO法人Yes, Deaf Can!のメンバーと。中央が廣瀬さん、その左に立つのが、ペギー・ブロッサーさん ③2021年度のチャリティイベントでは、廣瀬さんらの講演や、開発途上国のろう者からの動画発信を行った ④YDCの定期総会の様子



派遣から 始まる 未来



進学、非営利団体入職や
起業の道を選んだ先輩隊員

▶NPO法人Yes, Deaf Can! 設立

廣瀬芽里さん Meri Hirose

ドミニカ共和国/青少年活動/2012年度3次隊・栃木県出身

起業を目指すろう者を 金融の面から支援したい

「ろう者でも健常者と同じようにできるということを広めたいのです」

聴覚障害のあるろう者の自立を支援し、健常者が抱くろう者への思い込みを改めてきた廣瀬芽里さん。自身も聴覚障害があるが、青年海外協力隊員としてドミニカ共和国で2年半の活動に従事した。活動を通じて、ろう者の支援には自立が必要だと痛感した。そこで協力隊から帰国後、事業を起こしたというろう者へのマイクロファイナンスを行う『Yes, Deaf Can!』(以下、YDC)を設立した。「飲食店やパン屋、屋台店を開くろう者の自立を支援する小口融資事業です」。

YDCは2019年にNPO法人化し、現在融資第1号の準備中である。廣瀬さんがろう者の自立支援を思い立ったのは、ろう者にも健常者にもはびこる偏見を解きたかったからだ。13年にドミニカ共和国へ派遣されると、厳しい現実にとさらされた。

配属先はNGO東部福祉慈善団体が運営する「Hogar del Niño」(子どもの家の意)、ろう学校を併設する小中一貫校だ。ろう学校は普通校より奥まった場所、両校の生徒の交流は乏しい。国旗の掲揚も別々なら健常者の制服にあるワッペンもろう生徒にはなかった。80名のろう生徒は不満を募らせていた。先生は健常者ばかりで手話の教え方もわからず、ろう者を理解できなかった(※1)。

YDCの設立も進めた。「途上国にはろう者への金融面の支援策が乏しいからです」

途上国の貧しい人への小口融資事業、マイクロファイナンスは健常者が主な対象で、しかも高金利をかけられる例もある。そこで廣瀬さんはろう者を対象に、無利子で少額を貸す事業モデルをつくった。資金はYDCが販売する商品やイベントの収益と寄付。早速手を挙げたのがカフェを経営するネパールの夫婦だ。「コーヒー豆を手挽きしているのお客様を待たせてしまう。電動の挽き機がほしいそうです」

夫婦とは動画アプリで話す。夫婦は店の繁盛ぶりや、銀行が却下したローン申請書を見せた。売り上げ次第で

「同じ人間なのになぜこんなに差があるの?」

学校だけではない。廣瀬さんのホームステイ先のろう者家庭では、家族の無理解による引きこもり意識もあった。家族は、ろう者は仕事もなく、何もできないので家から出られないという。廣瀬さんはスペイン語の手話で伝えた。

「そんなことはありません、ろう者でも立派な人はたくさんいます」

NGO幹部には、ろう者も健常者と同じ扱いをしてほしい、制服にはワッペンを、国旗掲揚は健常者と共に訴えた。手話の講習会やチャリティイベント、マラソン大会を実施し、ろう者と健常者の壁を取り去る活動をした。さらに日本大使館の『草の根・人間の安全保障無償資金協力プログラム』で1000万円の支援金を得ると、職業訓練校の教室建築と、調理師や美容師、手話講師などを養成するコース設置費用に充てた。

「ろう者への考え方、環境は私がほとんど変えたといってもいいかな」

任期を半年間延長して15年にドミニカ共和国から帰国すると、ろう者の知人でアメリカ人のペギー・ブロッサーさんと共に『Nadeshiko Yoriai (撫子寄合)』という日本人ろう者の生活向上を目指す団体を立ち上げ、代表として尽力。その傍ら、世界のろう者支援活動を具現化するべく

う者を雇うという。この熱心な夫婦への貸し付けを決めるため、今後ネパールへ視察予定である。

「物を寄付してくれる人もいますが、魚を寄付するのではなく、釣竿を寄付して魚を釣ってもらうのです」

そんな廣瀬さんは、コロナ禍でオンラインで仕事ができると知り、東京から長野県安曇野市に移住を決めた。なぜ長野に?「ろう者のためのゲストハウスを建てたいと思っています」。

世界中のろう者の旅人が、日本の文化や農業を体験できる場を提供したい。廣瀬さんが将来つくる安曇野のゲストハウスの庭園には、ろう者も健常者も行き交う世界地図が広がるだろう。そこは常に各国手話や国際手話でとてもにぎやかな交差点になるのである。

※1:手話は、手指腕の動きなどの手指動作や、顔の部位や感情表現で伝える非手指動作で成り立つ。アメリカ手話(ASL)のほか、フランス手話やロシア手話、アラブ手話など各国手話があり、どの国のろう者も学びやすい。共通の補助語として国際手話(ISL)がある。

※2:読話、話し手の口の動きや表情などから状況を推測して話の内容を読み取る方法。

Yes, Deaf Can!
https://yesdeafcan.com/

Nadeshiko Yoriai
https://nadeshikoyoriai.site/

あの場所、
地球の、
あの日、
あの場所で。

任地の思い出を聞きました。

最期のセレモニーも トンガでは 音楽で彩ります

南太平洋に浮かぶトンガ王国では、生活に音楽が溶け込んでいます。教会では讃美歌の美しい合唱を聴くことができますし、町を走るバスからも、大音量で音楽が流れてきます。友人・知人同士で、誰かの歌声に別の人が音を重ねて「ハモる」のも日常茶飯事で、そのレベルの高さにはいつも驚かされました。

常に音楽と共にあるトンガの人々にとって、お葬式でも音楽は欠かせません。日本ではお通夜のあとから



Illustration = 牧野良幸 Text = 新海美保

お葬式まで、故人のそばでろうそくや線香を絶やさないように交代で「寝ずの番」をしますが、トンガでは誰かが亡くなると、家族や親戚だけでなく、地域の合唱団が交代で歌い続けます。高等専門学校の音楽コースでバイオリンを教えていた音楽隊員の私にもよく声がかかりました。音楽コースの学生たち数十人と共に亡くなった方の家へ行き、夜通し歌ったり演奏したり。翌日、教会に向かうお葬式の行列でもブラスバンドの演奏があり、お葬式が終わる最期まで、亡くなった方を音楽で包み、送り出すのです。

トンガの人々にとって、死者を弔う儀式は何より大切な行事であり、音楽は水や空気と同じくらい生活に不可欠なもの。だからこそ、音楽で「寝ずの番」をして送り出すのです。そうした場面に遭遇できたことは、とても貴重な経験でしたし、信心深いトンガの人々から、あらためて音楽の素晴らしさを学びました。

尾上香織さん
(トンガ/音楽/2017年度1次隊・熊本県出身)
熊本県国際協力推進員



待ってます、あなたを！
各界からのエール
From
ミカフェート



①ルワンダのコーヒー農園で農家の指導にあたるJosé、川島さん ②ルワンダのコミュニティ開発隊員(コーヒー隊員)らと



José・川島良彰さん
株式会社ミカフェート 代表取締役社長
国際協力機構(コッパ)分野にかかわる課題別支援委員会委員長
ほせ・かわしまよしあき ●1975年に大学留学でエルサルバドルへ渡ったのを、同国立コーヒー研究所に入所し、栽培・精選を習得。大手コーヒー会社「ジャマイカ・ハワイ・インドネシア」の農園開発に従事。2008年にミカフェート設立。著書に「人生を豊かにしたい人のための珈琲(マイナビ出版)ほか。

現場を知り、コーヒー生産国と消費国の橋渡し役として活躍してください

コーヒーの勉強をして、将来コーヒーの仕事がしたいと、18歳でエルサルバドルの大学へ単身留学しました。そのときに身元引受人を申し出てくれたワルテル・ベネケ駐日大使(当時)は、青年海外協力隊を中南米で初めて同国に誘致した方で、私をJICAエルサルバドル駐在員事務所连接到行ってくれました。そこで出会った隊員たちは「自分がいなかったらこの国はよくならない」といった感慨を持った人ばかりで、隊員同士が集まると国際協力に対する討論が始まりました。今、私の会社「ミカフェート」で、「自然環境と人権を守りながらおいしいコーヒー作り」に励む生産者と直接取引し、コーヒーを通じた持続可能な社会づくりに取り組んでいることには、当時の隊員の方々から何度も聞いた、国際協力への熱い思いがあると、いつても過言ではありません。

数年前から派遣国でコーヒー産業に関わる隊員に向け、技術専門員として派遣研修にあたり、またJICAがルワンダで取り組んでいる「コーヒーバリューチェーン強化振興プロジェクト(※)」に専門家として関わっています。目的はコーヒー生産地や生産者の地位向上のためだけではありません。コーヒー生産者と共に活動した協力隊員たちを、日本のコーヒー業界で必要とされる人材にしたいという思いがあります。現地語を理解し、現場を知り、コーヒーに関する専門的な知識や技術を身につけた人材は希少です。帰国後は生産国と消費国の橋渡し役として、生産者の置かれている状況も伝えていってください。

※コーヒーバリューチェーン強化振興プロジェクト…「コーヒーバリューチェーン強化プロジェクト(2017年~2020年)」の後継プロジェクトで、期間は2021年~2026年。人口の7割が農業に従事するルワンダで、外貨獲得手段として期待の大きいコーヒーの価値を上げるため、JICAが専門家を派遣し、生産、加工、流通、販売など、それぞれの工程における見直しを行っている。José、川島さんは両プロジェクトに関わる。

INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

NEWS

2022年度 JICA海外協力隊帰国隊員奨学金事業の実施について

本事業は、帰国後2年以内の帰国隊員のうち、JICA 海外協力隊への参加により得た知識および経験を国内外で生かす社会還元を促進するために、わが国を含めた世界の平和と安定のための活動に従事することを目的に、国内外の大学院への進学を志望する方および進学している方を対象とした奨学金給付事業です。10名程度に対し一律200万円を給付し、返済義務はありません。募集・選考は年に1回です。詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/scholarship/index.html



NEWS

JICA海外協力隊員(アフリカ派遣隊員)の月刊アフリカニュースへの寄稿再開

月刊アフリカニュースは毎月中旬に一般社団法人アフリカ協会の会員向けに配信され、翌月初めに一般公開されています。新型コロナウイルス感染症拡大により派遣中のJICA海外協力隊員が一斉帰国となったことに伴い、連載「JICA海外協力隊員寄稿」が2020年4月第90号から休止になっていました。このたび22年7月第117号から再開し、小林広幸事務局長による寄稿再開にあたってのご挨拶と、林 貴太郎隊員(チュニジア・環境教育・2021年度2次隊)の寄稿が掲載されています。ぜひご覧ください。

月刊アフリカニュース
一般社団法人アフリカ協会 (africasociety.or.jp)



NEWS

JICA海外協力隊・初代沖縄出身隊員に感謝状を授与

6月28日(火)に、沖縄出身海外協力隊初代隊員への感謝状授与式が行われました。青年海外協力隊事業は1965年に発足し、今年で58年の歴史がありますが、沖縄から初めて協力隊員が派遣されたのは、沖縄県が本土復帰する4年前の68年でした。当時沖縄からの派遣には制度上の課題があり、隊員本人にとっても大変な苦労や、大きな決断がありました。沖縄県の本土復帰50周年の節目となった今年、開発途上国の国造りの一助となり、また帰国後は沖縄県協力隊OV会を創立して後輩をサポートしてきた功績をたたえ、初代1968年度1次隊の金城秀寛様(ラオス・稲作)、宮平建雄様(インド・電気設備)、富村 繁様(ラオス・測量)の3名へ感謝状が授与されました。

NEWS

日本野球機構(NPB)との連携協力の覚書を再延長

このたびJICAは、NPBとの連携協力の覚書を再延長いたしました。NPBはプロ野球の運営を行いながら、野球の普及推進を通してスポーツの発展に寄与することを目的とした団体で、これまで海外協力隊を通じてNPB作成の野球指導用教材を3327冊、68カ国へ配布しております。学生野球資格回復制度研修会でもJICA海外協力隊セミナーを実施し、プロ野球経験者に協力隊事業を紹介してきました。今後も開発途上国における野球を通じて青少年の健全な育成を目的に、相互に連携・協力をしてまいります。



NPBの井原 敦事務局長(右)とJICA青年海外協力隊事務局の小林広幸事務局長

クロスロード

[2022年9月号]

第58巻第8号 通巻680号
発行日 2022(令和4)年9月1日

編集・発行：独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

制作協力：一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7 昇龍館ビル2階
ロゴタイプデザイン・誌面デザイン：(株)AND
印刷・製本：弘報印刷(株) 校正：佐藤智也

本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。
アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つ」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



編集後記

JICA事務局：日本からの国際貢献に参加したいという思いと、現地のニーズをつなげる今回の特集。現地生活をし、活動をする隊員だからこそ気づくことがあると思います。より良い活動と地域への貢献にぜひうまく活用してください。(脇田雄気)

クロスロード編集室：4月に行った協力隊まつり2022(東京・市ヶ谷会場)のブースで、話を聞かせてもらった団体の一つが今号のP.4 ボランティアレポートのKESTESでした。30年以上にわたって隊員の有志が支援を続けていることに感動を覚えました。(干川美奈子)

JICA 海外協力隊派遣現況

(2022年7月末現在)

現在の派遣国数
52カ国



■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	24	1
ガーナ	25	
ガボン	14	2
カメルーン	19	
ケニア	28	
ザンビア	3	
ジブチ	4	
ジンバブエ	10	
ナミビア	9	
ベナン	2	
ボツワナ	6	
マダガスカル	27	
マラウイ	19	
南アフリカ共和国	7	1
モザンビーク	12	1
ルワンダ	22	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	8	
ウズベキスタン	5	1
カンボジア	18	
キルギス	5	
スリランカ	1	
タイ	10	1
フィリピン	3	
ブータン	10	4
ベトナム	26	
マレーシア	7	4
モンゴル	4	
ラオス	12	4

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
パラオ	13	3
フィジー	1	1

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	5	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	12	
チュニジア	15	
ヨルダン	17	1

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン		1		2
ウルグアイ		1		
エクアドル	5			
エルサルバドル	6			
グアテマラ	11	1		
コスタリカ	4			
コロンビア	2	1		
セントルシア	2			
チリ	2			
ドミニカ共和国	13		5	
ニカラグア	2	2		
パナマ	3			
ブラグアイ	11	2		
ブラジル				4
ベリーズ	2			
ペルー	11	1		
ポリビア	9			
ホンジュラス	1			

(単位：人)

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	487 (207/280)	33 (24/9)	9 (2/7)	2 (2/0)	531 (235/296)
累計 (男性/女性)	46,301 (24,528/21,773)	6,592 (5,324/1,268)	1,551 (599/952)	549 (254/295)	54,993 (30,705/24,288)

一般 = 青年海外協力隊/海外協力隊 シニア = シニア海外協力隊 日系一般 = 日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊 日系シニア = 日系社会シニア海外協力隊

隊員めし

現地で作った日本食、
日本で作る現地めし

スリランカ



とさきちひろ
戸崎千尋さん

スリランカ/高齢者介護/2016年度3次隊・長崎県
大学卒業後、介護福祉士として長崎県の福祉施設に
8年間勤務し、協力隊に参加。帰国後、長崎県で国際
協力推進員に。福祉の活動をしていた頃から現在ま
で、「相手を知る」「思いを聞く」ことを大切にしながら
活動中。

現地で作った 日本食

「オムライス」

スリランカの方々に食べてもらおうと最初に
作ったのは「おにぎり」です。しかし「米を固め
るなんて信じられない」と意外にも大不評でし
た。スリランカで食べるフライドライスやチキ
ンにケチャップがついており、現地の友達がそ
れを好んで食べていたのを見て、「ケチャップ
は好きなんだ…」とオムライスを作ってみたと
ころ、大好評。後日、家庭で作って子どもにも
好評だったと感想をもらい嬉しくなりました。

●材料(2人分)

米	1合
鶏むね肉	100g
卵	2個
玉ねぎ	1/2個
にんじん	1/3本
塩	少々
コショウ	少々
ケチャップ	適量
油	適量

●レシピ

- ①米を炊く
- ②玉ねぎとにんじんをみじん切りにし、鶏むね肉を小さく切る
- ③油を少ししいたフライパンに玉ねぎとにんじん、鶏むね肉を入れて炒め、塩コショウで味付ける
- ④火が通ったら炊いた米を入れ、ケチャップで味付けをする
- ⑤皿に卵を割って混ぜ、別のフライパンでケチャップライスに乗せられるように円にして薄く焼く
- ⑥皿に盛ったケチャップライスに⑤を乗せ、卵の上にケチャップを適量かける

<編集室で再現した感想>
難易度 ★★★★★☆
達成感 ★★★★★☆

ケチャップライス作りまでは簡単ですが、卵に少し苦戦しました。ケチャップライスは、適当なサイズのお皿にぎゅっと詰め込んだあと、重ね合わせた平たい皿に移すことで楕円形に整えました。卵を一回り大きく作って皿の上でケチャップライスをくるむような形にすると見栄えがよくなりました。

<戸崎さんからのアドバイス>

私の友達、チキンしか食べない人が多かったため、豚肉や牛肉は使用しないように気をつけました。また、日本のお米を食べてほしかったので、日本の米を使って作りました。

日本で作る 現地めし

「チキンカレー」

スリランカは、ほぼ毎日毎食カレーを食べます。とてもスパイシーで、初めは汗・涙・鼻水が止まりませんでした。でも、そんな私を見かねて現地の人が特別に唐辛子少なめで別で作ってきてくださり、私は2年間ほぼ食費はゼロで過ごしました。スリランカでは、「おもてなしの文化」が根付いているからか、食べ物に困ったことは全くありませんでした。スリランカは紅茶も有名です。ティータイムには、驚くほど大量の砂糖を入れた熱々の紅茶を飲みながらビスケットなどを食べて、団らんを楽しみました。

●材料(4人分)

米(バスマティライス ※香り米)	3合程度(好みの量)
鶏もも肉	1枚
玉ねぎ	1個
調味料	
塩	少々
ブラックペッパー	10粒くらい
チキンガラムマサラ	スプーン3杯くらい
カレーパウダー	スプーン1杯くらい
ターメリック	スプーン半分
にんにく	少々
しょうが	少々
唐辛子(チリパウダー)	好みの量
カレーリーフ	3~5枚
シナモンスティック	2本程度

●レシピ

- ①米を炊く
- ②鶏もも肉は一口大に切り、チキンガラムマサラとブラックペッパー(つぶしたものと混ぜる。さらに、塩とターメリック、カレーパウダーを入れ、混ぜ合わせ10分~15分程度置いておく
- ③少し深めのフライパンに油を引き、みじん切りにしたにんにくを入れる。温まったら薄切りした玉ねぎとみじん切りにしたしょうがを入れる
- ④玉ねぎが茶色になってきたら、置いておいた②の鶏もも肉をフライパンに入れ、混ぜる
- ⑤鶏もも肉の周りに火が通ったら、100mlくらいの水を入れ、カレーリーフとシナモンスティック(折ったもの)と最後に唐辛子を入れ、ふたをして煮込む
- ⑥鶏もも肉に火が通ったら出来上がり

<編集室で再現した感想>
難易度 ★★★★★☆
達成感 ★★★★★☆

材料は多いものの、シナモンも粉ではなくシナモンスティックにするなど、そろえると香り豊かな本格的なカレーになると思います。辛い物が苦手なので唐辛子はほとんど入れませんでした。香りのよいバスマティライスとの相性がよいと思います。

<戸崎さんからのアドバイス>

スリランカカレーはあまり水分がないのが特徴です。⑤の唐辛子は辛い物が好きなスリランカの人には大量に入れますが、好みの分量で調整してください。

子どもたちにも大好評
「オムライス」



スパイスの香り豊かな
「チキンカレー」



レストランで食べたカレー



カウンターパートが作ってくれたスリランカカレー。
混ぜて食べます



スリランカで作ったオムライス。
友人の子どもも喜んでくれました



職場ではそれぞれが持ってきた
お弁当を皆でシェアして食べた



タイ

協力隊の活動中のひとこま。リス族の手工芸講習会に集う女性たち(写真左)。リス族の織機、綜統(そうこう)にはトウモロコシの芯が使われている(写真右)



手間暇かけて作られた、 タイの少数民族による伝統手工芸。 その魅力を広めたい

望月映子さんは手工芸隊員として、タイのチェンマイ市内を拠点に、さまざまな村を訪れた。行く先々で出会った山岳民族による細かい手仕事の数々に目を見張った。それぞれの民族に、刺しゅうや染色、織物など得意な手工芸技術があることを知った。「山岳地帯に住むモン族の女性たちは、お正月などの晴れ着として刺しゅうやパッチワークなどを施した衣装を作ります。リス族の女性が作る織物は、日本の真田紐に似ていて優美です。それらを初めて見たとき、デザイン性の高さに衝撃を受けました」。

タイに行くまでは現地のお土産などの手工芸品に対して、安かろう悪かろうというイメージを抱いていた。「悪い印象を払拭したい思いもありましたが、一番強く感じたのは、素晴らしいものを日本人に伝えた

い、見てもらいたいという気持ちでした」。

ファッションデザインを学んだ経験のある望月さんは、刺しゅうの色見本やデザインなどを作成し、アドバイスをした。手工芸品の商品価値を高めると、女性たちの現金収入を増やすことができるからだ。

いつかお店をやりたいという気持ちを温め続け、決意したのは帰国後5年たってから。その間、会社員として流通の仕組みや在庫管理を学べたのも強みだった。

2011年に初めて実店舗をオープンし、現在は静岡県の観光牧場内にお店を開いている。タイで仕入れたボタンなどの手芸材料、手仕事による雑貨の販売だけでなく、手工芸のワークショップも行っている。

「手工芸には人を動かす力があります。タイを中心に世界の人々のもの作りや、その楽しさについて広めていきたいです」



＼ ちのこだわり /

OB・OG ショップ

— 海外編 —



感銘を受けたモン族の刺しゅう。近代化に伴い、山岳民族の伝統技術は次第に失われているという。「しかし近年、タイ国内の若者たちもその素晴らしさに気づき始め、芸術を学ぶ学生などに注目されています」(望月さん)

SHOP DATA

ミトラパーブ

経営者：望月映子さん(タイ/手工芸/
2003年度3次隊・静岡県出身)

ウェブショップ

<https://www.instagram.com/mitpha/>



Text=村重貞紀 写真提供=ミトラパーブ



見やすく読みまちがえにくい
ユニバーサルデザインフォント
を採用しています。

